

# 仙台東部道路の東側は 瓦礫の山となっていた

宮城県仙台市若林消防団  
七郷分団六丁の目伊在部 部長

**佐藤 秀明** (41歳)  
消防団歴 14年 (会社員)



## 仙台市若林区の概要と仙台市の被害状況

宮城県仙台市若林区は、仙台市の東部から東南部に位置し、太平洋に面している。区西部の連坊・荒町・河原町などには、歴史的な古い町並みや伝統ある商店街がある。北部の卸町周辺は、東北最大の卸商センターと中央卸売市場を中心に東北の流通拠点を形成している。東南部の六郷・七郷地区は、広大な農地の中に屋敷林の集落が点在し、海岸部は黒松の防潮林と砂浜となっている。

若林区の総面積は50.69km<sup>2</sup>、人口は13万2,159人、世帯数は5万8,923世帯である（平成23年3月1日現在）。

3月11日の大地震では、仙台市若林区の遠見塚で6弱（6月23日気象庁発表）を観測した。仙台市全体の人的被害は死者797人、行方不明者32人、負傷者2,269人、住家被害は全壊2万9,469棟、



荒浜小学校付近（国土地理院）

半壊10万4,150棟、火災発生件数は39件、被害の大きい箇所は「沿岸部及び丘陵地（宅地）」となっている。

仙台市若林消防団は、5分団24部から構成され、団員数は361名であり、小型動力ポンプ付積載車が24台配備されている。今回の活動記録は、七郷分団六丁の目伊在部である。

## 家族の無事を確認し機械器具置場へ

私は、仕事のため若林区から泉区へ向かっている途中、泉警察署前で信号待ちをしていたところで地震にあった。最初は「揺れてるなあ」というくらいだったが、揺れている最中に、携帯電話とラジオに緊急地震速報が流れ、その後、揺れがひどくなった。あたりを見回すと、壁や看板が落ち、これはただごとではないと思い、Uターンして自宅に戻った。

七郷分団六丁の目伊在部の部長と併せて七郷分団の消防部長も兼務していたので、このくらいの規模だと数日は帰れないかなと思った。そのため、家族用にキャンプ道具を揃え、非常用の水、食糧、毛布等を用意した。その後、家族が帰宅し、家族全員の無事を確認してから、自宅から自転車で5分～10分のところの六丁の目伊在部の機械器具置場に向かい、消防団の活動を始めた。

## 震災当日の夜間に1時間ごとに巡回

七郷分団の取り決めとして、震度5強以上の地震の場合、下荒井部の機械器具置場に七郷分団員全員が無条件で集合となっていたので、私は、自転車で下荒井部の機械器具置場に向かった。下荒井部の機械器具置場に向かう途中、六丁の目伊在部の団員約20名のうち、数名と連絡がついた。

みんな、どのような行動を取れば良いかという指示を待っていた。取り決めでは下荒井部の機械器具置場へ集合だが、とりあえず自宅に戻り、家族の無事を確認した後に、地域を巡回してくれと指示を出した。

私が下荒井部の機械器具置場に着いたとき、集まっていたのはまだ数名だけだった。下荒井部の機械器具置場数百mのところまで津波が来ていたので、先に到着していた団員は救助活動や状況把握に出場していたためだった。

私は六丁の目伊在部に引き返す途中に避難所になっている七郷小学校と七郷中学校を見ると、何故この避難所に沿岸部の人々が避難しているのか不思議に思った。その中に藤田集落の人たちがいて、「川がとんでもなく溢れてきた」と話していた。川と言っても、堀程度のものだが、そこで本当に津波が来たのだと把握できた。この頃は、情報が入り乱れており、ある人は「もう荒浜は無いんだってよ」と言っていた。また、下荒井部の機械器具置場前の道路は、荒浜海岸につながる道路で、その両側に、津波から逃れるために避難してきた車がハザードランプを出して止まっていた。その時、周りの人が「津波が来ている」と言っていたが、仙台市のハザードマップにのっている洪水災害予測くらいだろうと思っていた。

当日は夜まで、六丁の目地区全体の被害状況把握と同時に、団員の把握に努めた。機械器具置場で一晩泊まっている間に、ラジオを聞くことができ、荒浜で200人～300人の死者との情報等、津波の状況を把握することができた。当時、電話は通じないが、メールは遅れて届いていた。その中に



搜索活動の様子（仙台市消防局提供）

団員からの連絡もあったが、それが待てずに地域の巡回と同時に、団員の家を1軒1軒回り、団員の状況把握を行った。団員は21名で、全員無事の確認は1晩では終わらなかった。実際に全員と会ったのは2、3日後であった。

団員には、まずは家庭のことをきちんとやっってから、消防団活動に出てきてくれと指示した。また、来られる団員は六丁の目伊在部の機械器具置場に集まってもらうように指示をした。六丁の目地区の巡回をしているときに、団本部から「人員報告してくれ」と連絡があった。しかし、分団には受令機しかなく、報告手段がないので、自転車で若林消防署まで行き、報告を行った。六丁の目では比較的建物被害が多く、作業場が倒れて道路をふさいでいた所もあったが、ケガ人はいなかった。当日は、倒れたものの撤去などの作業はできず、全体の被害状況の把握をするのが先だった。当日の夜に集まった団員は4～5名だったので、受令機のある車に全員が移動した。当日の夜は、ほとんど寝ずに、1時間おきに地域を巡回していた。倒れた建物のところでは、「誰かいますか?」と声をかけ、反応がなければ、そのまま次に行くしかなかった。また、大きな余震の時は、二次災害はないかどうか巡回した。

## 仙台東部道路の東側は瓦礫の山

翌朝明るくなったので、一旦、下荒井部の機械

器具置場に集まったが、それぞれ各部の管轄地区の確認を自主的にすることとし、再度六丁の目伊在部の機械器具置場に戻った。管内の建物の下に閉じこめられている人がいないことを確認して、また、下荒井部に戻ったが下荒井部の機械器具置場も通信手段が途切れていたため、どのような行動をしていいかわからない状況だった。

仙台東部道路まで水や泥が来ていたので、そこまでは津波が来ていたと思った。12日の午後、荒浜はどのような様子だろうと思い、六丁の目伊在部の団員8名と他の部の数人の団員とともに、長靴、防寒着、ヘルメットだけの装備で荒浜海水浴場まで行くことになった。

仙台東部道路の少し先は、もう車では行けない状況になっていた。松の木が流されて折り重なっており、しかも道路は水浸しで瓦礫の山となっていた。そのため、道路であろうと思われるところを、松の木を飛び越え、棒で泥をつつきながら、車の中に人がいないかどうか確認しながら進んでいった。

### 屋内消火栓のロープを利用して避難

1、2時間くらい進み、気が付いたら荒浜小学校の近くまで来ていた。この先は、大変なので戻ろうとしたとき、「みんな集まってくれ～」との声が荒浜小学校からした。まさか荒浜小学校に取り残されている人がいるとは思わなかった。小学校に取り残された団員がいて、自分たちを助けにきてくれたと思ったらしい。この団員が言うには、避難者が150人くらいいるとのことだった。地震当日の夜には、お年寄りとお小さな子どもはヘリですでに救出されていた。この団員が、荒浜小学校に取り残されている人たちに「ヘリが来るのは、明日になるか、あさってになるかわからない。一緒に避難するか、ヘリが来るのを待つか」と聞いたところ、避難したいという人が結構いたので、一部の避難者を残して、避難することになった。



搜索活動の様子（仙台市消防局提供）

取り残されていた消防団員が機転をきかせて、学校の屋内消火栓のホースを5本ほど取り、「ホースをロープ代わりにして、これをつかみながら歩いてください」と指示し、ホースの前後に必ず消防団員が付いて移動した。一緒に避難した人の中には、自分の知り合いや息子の同級生もおり、「どうだったの?」と聞いても、口にしたくない雰囲気だった。後で落ち着いてから話を聞くと、荒浜小学校の近くを人が流されたり、知り合いの家が流されていくのを目の当たりにして、ショックだったとのことだった。

荒浜小学校から避難した人は合計で80人～100人くらいで、連れて戻ってきた時には、もう薄暗かった。結局、荒浜小学校から仙台東部道路までの半分くらいの約600mを2時間余りかけて帰ってきた。避難してきた人が避難所へ行きたいということで、霞の目の飛行場の避難所まで、積載車5台でピストン輸送した。12日夜、避難者の移動が終わった後、機械器具置場で活動に参加できる者の名前を記入したり、書類の記入等を行い、団員とミーティングをして明日からどのような活動をしようかと話し合った。

### 仙台東部道路を拠点に搜索活動

13日は10名位で仙台東部道路を拠点に、搜索活動を行った。その時は、どこから手をつけたらいいのかかわからないし、重機はいつ来るかわからな



いという状況だったので、歩きながら手当たり次第に搜索をしていた。当時、持っている物はブルーシート、ガムテープ、マジックペンくらいで、搜索済みの車に「搜索終了」と隅に書いたりするくらいだった。

この時から遺体を扱うようになった。歩いている途中で、消防職員から「前日、搜索して遺体をくるんで置いてあるので、運んでくれ」との指示があった。車は通れる状態ではないし、ヘリで吊り上げてもらう場所すらなかったため、消防職員の指示で、広くてヘリでも気づくだろうという場所へ遺体を運んで並べた。資機材はほとんどなく、瓦礫の中から戸板を見つけ、ロープをかけ、担架がわりに運んでいる。消防職員も、遺体の搜索・搬送の手順がわからなかったため、手当たり次第の作業だった。最初は、泥の中に遺体がないかは、棒でつつくくらいしかできなかった。遺体を包むブルーシートも新しい物ではなく、その場所にあるものや流れ着いた毛布等を使ったり、遺体をくるむ紐も農業用ロープや流れ着いていたものを使った。

14日、15日頃になると、多少、疲労も出てきたので、出て来られる人が交替で、午前、午後とに分れて活動を行った。この時期になると、浸水していた場所の水が引き始め、遺体が新たに発見され、回収しきれないくらいの数にのぼった。また、道路が通行できるようになると地域に人が多く入ってくるようになり、津波注意報が出るとその人たちを避難誘導しなくてはならないため、搜索活動に支障がでるようになった。

その後は、団員を瓦礫処理・道路啓開と遺体搜索との班に分けた。例えば、30名位の団員がいると10名を泥や瓦礫をかたづけする班に、残り20名を2班に分けて消防職員と一緒に搜索活動に当たさせた。重機が入ったのは、地震から2週間後だったが、それ以前は堀に家屋が流されていると、消防職員がチェーンソーで切り、団員が1列に並んで瓦礫を手渡しでどかし、遺体を搜索するという形だった。

緊急消防援助隊や自衛隊が入ったのは12日にな



搜索活動の様子（仙台市消防局提供）

ってからだだった。ただ、被災地が広範囲なので、ブロックごとに担当範囲を決め、それぞれで活動を行った。その後、作業に慣れるにつれて要領がわかり、消防職員の指示も的確になってきて、消防職員が地図を用意し、「この地区は○部がついてくれ。〇〇署の職員には○部がついてくれ。」と隊が編成されるようになった。この頃になると、団員にも疲労もたまり、自宅もかたづけなければならない状況だったので、分団内では午前と午後でローテーションを組むようになった。また、団全体としても、3つにローテーションを組み、分団ごとにこの日にどこどこに何名ずつ出していくという形になった。

地震後2週間くらい経って重機が入ったが、重機が入ると人が多くては危険なため、会社も始まり搜索活動に参加できる人も減ってきたので、活動人数自体を減らしていった。しかし、七郷分団では団員1名が行方不明だったので、休みの日も団員搜索を続け、1か月後くらいに見つけることができた。私の場合は、1か月くらい休みはなかった。

時間が経ち、遺体の発見も減り、次第に活動に出る回数も少なくなった。消防団の活動終了は6月11日で、その前の1か月くらいは搜索活動の休みの日を作ったが、団員には機械器具置場に出てきてもらっていた。その後、役割分担から、3日に1回の搜索活動となったが、実際には休みでも「今日、暇なんで何かさせてください」と言って機械器具置場に来る団員もいた。



## 防犯のために巡回を実施

六丁の目伊在部の管轄地域では、カー用品や電化製品などの盗難が増えたため、私独自の判断で、担当のない団員を、体を休める者と防犯のため巡回する者とに分けた。そうして、毎日ではないが、防犯のため巡回してもらった。また、下荒井部の機械器具置場から100mくらいの距離に七郷小学校があり、このプレハブ校舎が倒壊の恐れがあるとのことで、校長先生の依頼で、プレハブ校舎の中にある児童の持ち物（ランドセル等の道具）を持ち出す手伝いをした。

## 徐々に搜索活動の手順を改善

自分の周りの団員の中では、大きな怪我はなかったが、搜索活動中、窪みにはまった者が数名いた。搜索活動にあたっては、段階を踏んでマニュアル化され、徐々に作業手順が改善されてきた。例えば、最初は長靴で活動していたが、安全靴に変更した。また、浸水しているところで搜索活動を行わなければならないときは、中敷きに鉄板を入れる等の工夫をしながら活動した。団員は、最初は気が張っているの、寝なくても食べなくてもやらなければいけないという気持ちで動いていたが、だんだん疲れがたまってくると「いつまで続くんだ」とイライラしてくる団員も出るようになった。

団員には、若林消防署からアルファ米、水、飲み物が配給されたが、2、3日経ってからだった。その間は、七郷地区のお母さんたちが自分たちの米で炊き出しをして、おにぎりを握ってくれた。白おにぎり1食1個、1日3個が2、3日続いた。その後は、汁物も出してくれた。積載車の燃料は、若林消防署に緊急用燃料があるので、11、12日は若林消防署に行って補給していたが、次第に若林消防署の燃料も無くなってきた。若林消防署では、青葉区のガソリンスタンドから緊急



被災した荒浜航空分署付近（国土地理院）

車両用の燃料を買ってきたり、最後には自衛隊から補給してもらっていた。また、団員が毎日通うガソリンスタンドに問い合わせたところ、「緊急車両用の燃料は優先する」と言ってくれ、積載車に優先的に給油してくれた。その後、団員の知り合いのガソリンスタンドが工面してくれて、優先的に給油してもらえた。

## 分団の行動は、分団で判断するしかない

分団の行動は、分団で判断するしかない。東日本大震災の1カ月前に分団の情報伝達訓練を実施していて、何かあった場合は若林消防署荒浜航空分署に集まって、ここを拠点として活動することになっていたが、今回の地震ではその拠点である荒浜航空分署そのものが被災してしまった。だれもそこまで想定していなかった。なお、若林消防団では、毎年6月12日に津波避難訓練を実施しており、逃げる手段、ルートの再確認を行っていた。訓練は、ノウハウを覚えるだけではなく、訓練に参加しているだけで本人の意識が違ってくるのではないかと思う。普段はチャラチャラしていても、こういう震災のときはきちんとした認識を持って動いていかなければならないと思う。

# 大震災時の消防団活動を いかに継承すべきか

宮城県仙台市宮城野消防団  
高砂分団南福室部 班長

**川村 康裕** (56歳)  
消防団歴 10年 (会社員)



## 高砂分団南福室部の普段の消防団活動

高砂分団南福室部は、宮城野区鶴巻、福田町が担当地区で、その地区内で災害が発生した場合は出動し消火活動を行っている。災害発生時には電話、防災メールと無線受令機に出場指令が入るようになっている。

年間の出動回数はそれほど多くないが、主に常備消防が到着するまでの初期消火活動や、常備消防に引き継いだ後の残火処理活動や現場の安全管理を行っている。

積載車には、簡易救助資機材（チェーンソー、ジャッキ、バール、カッター等）も積載されており、軽易な救助活動も行えるようになっている。これらの資機材を活用した救助訓練や、AEDを使用した応急手当訓練等を定期的実施している。

また、仙台市では震度5弱以上の地震が発生した場合、自主的に機械器具置場に参集することとなっている。

## 地震発生時、津波のことは頭になかった

私は自動車の部品会社に勤めており、4階建ての建物の2階にいた。揺れは3分ぐらい続き段々強くなってきたので、屋外に避難した。柵や外壁



七北田川と中野小学校周辺（国土地理院）

も崩壊寸前で、室内の机、ロッカー、商品も全部倒れ、足の踏み場がない状態だった。50人ぐらいいた従業員を集めて全員の無事を確認した後、解散した。

自宅に着いてすぐ活動服に着替えて機械器具置場に徒歩で向かった。自然と身体が動いたという感じだった。近くに勤めている女房の無事も確認できた。

地震が起きた時、津波のことは頭になかった。宮城県沖地震が30年以内に99%の確率で来るということで、防災訓練を行ったり、避難マップを作ったりはしていたが、いざ局面を迎えたときに、そこまで行動には移れなかった。

津波警報などの情報を伝えるスピーカーが沿岸部にはあるが、この近くには防災行政無線はない。仙台市からの防災メールは届いていた。

15時半頃には置場に着いた。置場に被害はなかった。置場に入った時点で、堤防にあるスピーカ

一から津波警報のサイレンが鳴り響いていた。サイレンの合間に広報文が入っていたが、皆動転していて広報文は聞こえなかったという人もいた。このサイレンのおかげで、被害が少しは軽減されていると思う。しかし、その時はあまり津波を意識しておらず、周囲の方が気になって、それどころではなかった。津波が到達した時点で我に返ったというか、大変なことが起きていると思った。

津波よりも住民や近隣の方に怪我はないのかと心配で、積載車で広報を行った。高砂分団の管轄区域は陸地側で、海沿いの港分団に所属していれば津波のことも考慮したかもしれないが、我々の場合は、河川と住民の避難のことを考え、「小学校に避難してください」と広報する方が先だった。その後、防災メールや車載の無線受令機で津波の情報を得て、「津波が来ているので河川には近づかないように」と加えて広報した。なお、仙台市には水門がないので、消防団員に対する水門閉鎖の業務はない。

### 避難広報から救助・搬送活動へ

広報中に通行人から、七北田川で救助を求めている人がいると聞き、私ともう1名の団員で救助に向かった。七北田川が逆流し流されてきたらしい。この川の流域は大雨の時は床上浸水が度々発生するが、津波がここまで来るとは思ってもいなかった。

現場に着くと、怪我をした女性がいて、人が川に流されていると聞いた。そのとき他の部の積載車が来たので、そちらに女性の救助を依頼し、我々は川で流されている人の救助に向かった。車載ロープで助けようとしたが長さが短く届かなかった。そこで、消防ホースをロープ代わりに活用し、川に入って救助しようとしていた人（30歳代）にホースを渡して結んでもらい、4、5人の男性と一緒にホースを引き上げて助けた。

救助した人は40歳代の男性で、相当流されてきたようだった。川の真ん中だったら助けることは



浸水した宮城野区にある仙台市立中野小学校

できなかつたが、流木にたまたまひっかかり、河川敷からすぐ近くのところまで流れ着いていたのと、住民の協力があったから救助することができた。救助した人は顔面蒼白で「寒い、寒い」と言うので、積載車に乗せ、自分が着ていた防寒ジャンパーを着せ、積み込んであったものをかぶせ保温し、車のヒーターの温度を上げて、励ましながら現場から一番近い厚生年金病院に搬送した。サイレンを鳴らし走行したが、普段なら2、3分で行けるところを、交通渋滞があり、浸水箇所を回避して遠回りしたので、10分～15分かかった。病院はパニック状態だったが、すぐ受け入れてくれた。

津波後に雪が降り、空が真っ暗で異様な風景だった。生存して救助できた人もいたが、我々が行ってもどうしようもないところもあり、ヘリでないと近づけない所もあった。ただヘリにも限度があった。

屋根や木の上に避難した人が、下が浸水した状態で1日～2日ぐらい動けなかったという話も後で聞いた。

### 翌日、水が引けてからの検索活動

救助した人を病院に収容した後、仙台市宮城野消防署高砂分署に活動報告のため向かった。

その途中、マンションや学校がある白鳥地区が浸水していたのを見たので、中にいる住民が無事



か確認・捜索に行った。住民には「部屋の中に子どもがいる」と言う人もいたので、「とにかく動くな」と声かけして回った。マンションが4棟あるうち、1番手前の棟の2階以上をノックして声をかけたが、その時点では皆パニックになっていた。暗くなって寒いし全部回りきれず、部屋の中に子どもいると言われた部屋の周囲だけ回った。余震も続いていたので、近隣の広報活動や被害状況を確認しながら回った。

翌日、水が引いた段階で消防団と他県からの応援隊と捜索活動に入った。多賀城市方面に行く道路は浸水して通れなかった。近くの福田町部と、協力して回った。浸水は1階部分ぐらいだった。その後捜索の段階で被害が激しいことがわかった。水が引くまでは入れず、奥がどうなっているかわからなかった。県道塩竈亘理線で津波が堰き止められたが、元々低い白鳥地区と中野新町は浸水した。ビール工場の貨車積みのコンテナごと流されて、水が引いた段階で缶ビールや缶ジュース等が白鳥地区に散乱している状態だった。モータープールの新車や、港地区の倉庫の中の商品も流されてきた。

隣の塩竈市の石油コンビナート地区が燃えていた。中野地区や蒲生地区も燃えていたが、他県の緊急消防援助隊と仙台市消防局が合同で消火作業した。

## 当日集まったのは12名中5名

当日、置場に集まったのは12名中5名。私ともう1名の団員2名で活動に入り、3名は置場に待機した。夜は仕事が終わってから数名集まってきて、日を追うごとに一人ふたりと増えた。小さな子どもがいる団員や介護が必要な年寄りを抱えている団員もいるので、順番で家に帰すようにした。

捜索活動は消防職員と団員、自衛隊、警察と合同で行った。高砂分署と現地でミーティングしながら行った。私は蒲生、中野、新浜、岡田地区の

捜索に回った。最初は毎日だったが、疲れや仕事の関係でローテーションを組んだ。

遺体を見つけた段階で消防の責任者に話して、責任者から警察に連絡し、居場所の目印をつけてブルーシートをかぶせ、警察にお渡しするという形をとった。遺体を出して搬送ということはしていない。1か月经つと腐敗していたりして、消防の範疇外だった。

会社勤めの方は助かっているが、自宅にいた人やお年寄りの方は被害にあった人が多かった。捜索で何人かの方を見つけ、遺体もある程度見つけたが、すべてお年寄りだった。

鶴巻小学校が避難場所になり、町内会はそこに本部を設けたので、我々は、防災センターや知り合いの所から発電機を借りてきたりして、避難所運営の手伝いもした。

食事は、置場に備蓄はしておらず、当日は多分食べていない。カップラーメンをもらったり、避難所やOBから差し入れをいただいた。うちの地区のプロパンを使っている家で、OBや近隣の方は農家が大半だったので、そこから炊き出しをいただいた。

当日夜自宅に戻って女房の顔を見て安心した。濡れた衣服を着替えてまた置場に戻った。朝方、自宅に戻ってまた着替えて戻った。置場には、ほぼ毎日詰め、宮城野消防団全体でローテーションを組むようになって南福室部も3日に1回ほど休みができた。4月29日に消防団の捜索活動を終了したが、港分団など有志で活動していたところもあった。

通信については、双方向で会話ができる無線機があれば良いと感じた。一方的に受ける他に、携帯無線の整備とか必要だと思う。設備があった方が我々としても情報がとれるし、動けるし。まわりの活動状況がわからないのが現状だ。

ガソリンについては、緊急車両用は優先的に確保できたが、最初は置場に来るまでの移動にも足りなかった。

## 家族の安否と職場の復旧状況

弟は自衛隊員で、翌日には招集がかかり、私は消防団に行っていて、家のことは兄がやってくれた。兄も元々は消防団であった。家族は無事だったが、連絡が取れなかった女房の母が、津波で流され、震災から49日目に近所で見つかった。その地域を前にも検索していたが、その時は見つけれなかった。蒲生に住んでいた親戚のお嫁さんも犠牲になり、まだ見つからない。

1回目の3月11日の地震の揺れはそうでもなかったが、2回目の4月7日の地震の揺れで会社の被害が大きくなり、追い打ちをかけられたようだった。正常に稼働し始めたのは、連休に片付けて、5月ぐらい、本格的に動き始めたのは6月末で、ようやく従業員が戻ってきて営業を開始した。

家屋や社屋は外壁がなくシート貼りで、雨が降れば雨漏りし、修理が終わったのが8月だった。親会社から依頼を受けた業者に修復してもらっていたので業務の再開が遅くなった。

私個人としては、消防団活動が一段落したと感じたのは、8月ぐらいからだ。余震が震度4となっても、「またか」と思う程度になった。さらに精神的に落ち着いてきたのは、9月になって、お義母さんの納骨も終わって一区切りついたと感じた。しかし、納めるお墓が流されてしまっただけで無いのだ。

## 震災教訓をどのように伝えていくべきか

中野地区の何もなくなった情景は、一生忘れない。声が出なかった。女房の実家の周辺も同じような状況だった。防潮林の松林が流されてほとんどない状態だった。

中野、新浜地区では消防団員2名が殉職した。避難誘導、お年寄りの救助活動中のことだった。仲間の殉職に衝撃を受けた。しかし、依然として行方不明の方が多数いることを考えると、いつま



被災した消防団積載車（仙台市消防局提供）

でも傷心している場合ではない。中野地区に入ったとき津波により置場が無くなったり、積載車が流されているのを見ているので、その団員の分までやらないといけなと思った。やるしかない。

団員は、使命感を持って動いていると思う。日頃から研修や訓練に参加しているため、災害に出くわせば、「やらねばならない」という気持ちに団員全てがなると思う。そして、消防団が維持できているのは地域の住民とのつながりのお陰だと思ふ。

津波の教訓は、段々忘れられていくことであるので、教育の場で伝えていくしかないと思う。私達が津波の検索に入った時、面白半分で写真を撮る人もいたし、会社などで面白半分で話している人には、実際に見ないで言われるのも変な情報が入ってしまうと困るので、やめろと言う。ただ、我々が見たことをそのまま言うのも聞いた人にどう受け取られるのかわからないし、被害のあった人の前で話すと追い打ちかけることになってしまうのではないかと躊躇してしまう。

遺体を発見したときはショックだが、その時点で仲間と話をしたりして、尾を引かないようにしているので、消防団員のPTSDなどの話は聞かない。あとは割り切るしかない。そういう話は団員同士だけであるのがいいのか、家族にはどこまで話していいのか。このような消防団活動の貴重な経験をどのように伝えていくべきか、難しいと思った。

# 仙台空港への避難が死者を 最小限に抑えた

宮城県名取市消防団  
下増田分団 分団長 **加藤 治** (58歳)  
消防団歴 32年 (農業)



## 名取市の概要と被害状況

名取市は、宮城県のほぼ中央に位置し、名取川や阿武隈川に囲まれており、北は仙台市に隣接し、南は岩沼市に隣接している。地形的には、仙南平野に入り海岸平野で構成され、標高は全体的に低い。総面積100.07km<sup>2</sup>で推計人口7万2,041人(平成23年11月現在)である。市内に仙台空港を持つ。

名取市消防団は、団長および副団長の配下に6分団37部とラッパ隊、女性消防隊の総数473名(平成23年4月時点)であった。

震災による消防団の人的被害は、死者15人、行方不明者1人(平成23年8月22日現在)であり、物的被害は、8箇所の詰め所及び車庫が全壊・4箇所の詰め所等が一部損壊し、7台の小型動力ポンプ積載車が全損している。津波襲来後に浸水域内で火災が発生し、多くの漂流物や建物に延焼している。消防本部の記録によれば、3月11日から5月16日の間に消防本部と消防団は、津波被害を受けた関上・北釜地区の救助・捜索活動を実施し、457人の救助と331体の遺体収容を緊急消防援助隊等と協力し行っている。

東日本大震災により名取市では、市内で震度6強の揺れを観測している。名取市は、14時49分の大津波警報の発表と同時に関上地区と北釜地区に避難指示を発表している。その後津波は、16時前

頃から名取市の沿岸に襲来し始めている。津波による名取市の人的被害は、死者911名、行方不明者55人、負傷者205人であった。また住宅被害は、全壊2,801棟、半壊1,129棟であった。津波による浸水面積は、27km<sup>2</sup>であったことから市の27%のエリアが津波の被害を受けたことになる。

## 先輩の勧めで入った消防団

私の集落は下増田分団の第2部になるんですけど、先輩が辞める時に新しい人を勧誘する流れがありまして。私は農業をやっていますんで、家にいるので消防団員になったら役に立つんじゃないかという推薦もあって、消防団に入りました。私の入った頃は、地域の皆さんも消防団に入るのが当然というのもありました。仕事は兼業農家で昼間は水道工事業をしています。ある程度は自由が利くので近辺で仕事出来るよう選んでいます。そういう仕事をしないと分団長の役割を果たせない



説明をする加藤分団長





消防隊と一緒に捜索活動を行う消防団員

ので。

下増田分団は5部まであります。定員が60名で1つの部で12名くらい。構成は分団長が1名、副分団長が1名、部長が1名ずつ5名、班長が2名ずつ10名、と団員ですね。下が30歳代前半で、上は60歳くらいになると辞めますね。昼間地元にはいない人は8割になります。ただ、北釜地区は専業の方はいるので誘導する人数はいました。ただ、2部は昼間、人がいなくて、今回の大震災でも避難誘導は出来なかったはず。要するに定員は満たしているけど、昼間の人数は足りていない状況です。

消防装備は各部に小型ポンプ積載車があります。無線関係は受令機を車に積んでいるだけです。活動している時に連絡を取る手段は携帯電話しか無いです。

## 成功した仙台空港ビルへの避難

下増田分団の普段の活動は、1月の第二日曜日に消防出初式。春・秋の火災予防週間に防火の呼びかけや、消防資機材や消火栓の点検清掃を行います。あと夏に操法訓練。それと2年に1度、消防団が阿武隈川流域の水防団にもなっているので、その活動を7月くらいに行います。あと夜の見回りを各部で、春と夏の火災予防週間に巡回活動をやります。火災予防の出動回数は年間で2回か3回です。延べの活動日数は多くて10日くらいですね。

津波の際の活動内容は北釜地区と広浦地区の海に近い部分での広報活動だけになっています。操

作する水門は下増田にはありませんでした。1年前のチリ津波の時は、団員は北釜集会所に集まって、北釜地区・広浦地区で広報活動をしました。広浦地区は下増田公民館に避難させました。

北釜地区は本来、下増田公民館に避難させるんですけど、町内の役員さんたちと近くにある仙台空港の事務所長とで色々話があったらしくて、空港ビルに避難できるようお願いしたみたいです。それで空港ビルに避難させました。この時が避難誘導をする初めてのケースでした。消防本部からは公民館に避難させるよう指令が出ていて、公民館に避難誘導するつもりでいました。しかし、町内会からは空港ビルに避難すると言われ、どっちに避難させるのかひと悶着ありました。結局、空港ビルの方に避難しました。

だから津波の被害が起きそうな地区なので、どこに避難するのか地区で話し合いはできていたと思います。今回の津波でも、空港ビルに避難したんです。だから、犠牲者が出ましたけど、あれだけで済んだんです。住民を公民館まで避難させていたら、もっと被害は大きかったと思います。

住民は北釜で6割くらいは避難しましたね。広浦は4割くらいでした。ただ中には、お年寄りの方で、俺は死んでも良いんだって人もいました。

## 地震発生直後から津波が来るまで

3月11日に地震が発生した時は、会議の最中で増田の町中にいました。相当な揺れだったので津波が来るかなって感じは受けましたけど、家の近くまで来ると思わなかったですね。来ても陸には上がらないんじゃないかなって思っていました。家にお袋がいるんで、そっちが心配でしたね。電気が全部落ちていたし、高齢なんで連絡が来ても出ないし。

それで、車で家まで戻りました。普通は10分くらいで行くんですけど、30分くらいかかりました。仙台バイパスをって行くんですけど、渋滞していて、信号もなくて横断できないんですね。

その間、ラジオはかけていました。でも情報は入っているんだけど、まずは家に帰ろうってことで、上の空で聞いているんです。

自宅に戻ったらお袋は無事でした。家の近くには新しい人たちがけっこう入居しているんですよ。その人たちがおっかながって、どうしたらいいんですかって困っているんです。それで、避難した方がいいですよと、下増田小学校の方に避難させました。より高いところを目指して増田中学校の方に向かった人もいました。

お袋は家に置いてました。私もいましたし、避難所に連れて行っても高齢なんで家にいた方がいいのかなって。ただ、余震も続いていたんで、車の中に避難させていました。建物の中にいるより、良いのかなと思って。家の前が畑になっていて建物が倒れても影響ないなと思って。その時に津波の事は考えられなかったです。

それから消防本部と連絡を取ろうとしたけど、携帯電話が繋がらない。私は副分団長でしたから、分団長と連絡を取ろうとしたけど、連絡が取れない。海側の団員は避難誘導しているなって感じはしていたんですけど、そうしているうちに津波が来たんですね。家のあたりで道路から1mくらい。ただ家は少し高い所に建てたので、地盤から30cmくらいまででした。津波が来たんで、お袋を車から出して家の2階に避難させました。津波が来るまでは、出先から自宅に戻るのに時間を使ってしまいました。

## 命を懸けた消防活動

下増田分団では消防活動中に4名の団員が、消防活動以外で1名が亡くなりました。空港ビル東側の橋の袂で流された積載車が見つかりました。乗っていた団員は、自分たちのエリアで避難の広報をして帰ってきて、もう一度広報してくるといいう話になったみたいです。それで3回目の広報を終え、貞山堀に架かった空港ビルに向かう橋を渡ろうとして流されたみたいです。橋の上に流され

た家の瓦礫がたまっていて、避難路を絶たれてしまったみたいです。住民は55人の方が亡くなりました（平成23年9月14日現在）。400人の方は助かっています。200人の方は空港ビルに避難していました。高齢の方も多かったですし、公民館まで遠かったので仙台空港との協定が無ければもっと多くの方が亡くなっていました。

また、消防団員の1名は、勤め先から帰って来て、高齢の足の悪い母を車に乗付けて避難しようとした時に母と一緒に流されてしまいました。

## 取り残された多くの住民を救出する

夜の12時過ぎになると水位が下がってきました。外を見ると、水の中を知り合いの息子さんが歩いてきて、広浦地区の自分の家で、家族が帰って来るのを待っているって言うんです。仙台から何時間もかけて水の中を歩いてきたみたいです。それで、取り残された人が一杯いるんだと直感で思って、次の朝、夜明けを待って、農業用トラクターでそっちの方にいきました。橋を越えたとなんに、その有様が見えて。えーって、自分の家の方と有様が全く違うんですよ、別世界の様で。家は流されて潰れているし、松の木は流れて道路を塞いでいるし。そこに何人か残っているんですよ。それで、近くにいた婆さんに声をかけて、取り残された人がいないか聞いたら、もしかしたら、家の中に閉じ込められているかもしれないって言うんです。

それで、橋の上から大きな声で叫んだんです。そしたら婆ちゃんが窓開けて手を振ったんです。



堀越しに確認する消防団員

それで、誰か助けを呼ばなければと思って、誰か呼んでくるから待ってと声かけて。自分の家の近くに戻って、団員に声をかけて救出が始まったんですね。2階に避難した人たちが15、16人取り残されていたんじゃないかな。50歳から60歳代の男性も何人か残って居たんでその人たちの手を借りて、そのうち消防本部の救助隊が来たんで、その人たちの手も借りて。年寄りだと、体が不自由な方も多くて、2階から降ろしたりするのも大変なんで、消防本部の若い人たちに手伝って貰って。当日はやっぱり寒いし、濡れていたりお腹すいたりもしているんで、急がないといけないと思って。

救出をしたのは3日間くらいですかね。皆で30人~40人は救出したんじゃないですかね。後は、避難所は嫌だから家にいるっていう人もいますんで、説得して連れ出して。消防団が言うとやっぱり違うんですね、分かったって理解してくれて。

## 消防団の立て直しは私の使命

その後は1、2か月、行方不明者の捜索、遺体の収容をしました。団員は各部から2名くらいずつ出してもらっていました。1週間くらいは結構団員も出てきてくれたんですけど、団員本来の仕事が再開してからは、なかなか集まらなくて。私は当時、副分団長だったんで、団員と連絡取り合って、やりくりしていました。活動が落ち着いて自分の事が出来るようになったのは1か月くらいたってからです。やっと家の農作業小屋の清掃、片付けに手を付けられる様になって。

震災後、消防団を辞めた団員はいないです。私の前の分団長が3月に辞めることになっていたんですけど、こんな状態なので少し待ってもらって8月に辞めました。あと第5部の部長さん、4名も団員を亡くしていて辛い部分もあるんです。分団長と共に辞めています。これからは私が分団を立て直さないといけないと覚悟しています。

## 団員を殉職させないために

各地区に最低3階以上の高層の頑丈な建物があればいいと感じます。後は近くに空港鉄道があるんで、それを利用できないかなと思って。今は立ち入りできませんから。あとはやっぱり、皆で津波の恐ろしさを共有すべきです。

消防団の命を守る為に必要と感じたのは通信の機材です。双方向で通話できる無線機やトランシーバー。今回、自衛隊の方と捜索して、自衛隊の無線機は凄いなと、私らにそれがあればいいなと、それでなくても消防で使ってる無線機。それに敵う物はないなって思います。それと取り残された人を救う為に、各部に1艘くらいのボート。ゴムだと瓦礫なんかで危ないんでアルミの折り畳み出来るボート。それと団員に救命胴衣です。

これからは自分たちの身を自分で守る。その為に、消防団が知恵を身につけなければいけないと感じています。団員を亡くしていますけど、やっぱり悔しいです。団員の命を落とさない為にも、何か考えないといけない、自分たちで行動を起こさないといけないと思います。若い団員を守る為にもね。

## 救いは住民からの感謝の言葉

これだけ生存者の方を救出できたのは、厳しいながらも良かったなって思います。後からお礼を言われるんです。あんたに助けてもらって良かったよって、それだけが救いです。当日、家が心配で海側の方へ車を走らせる人が沢山いたんです。その有様を見て、一人の団員が小型ポンプ積載車を横向にして道を塞いで止めたんです。良くやったなって、私は褒めてやりたいと思います。厳しいながらも助けた人に感謝される、それが一番です。



# 増田川の水が引くのを見て 津波を直感

宮城県名取市消防団  
閑上分団 副分団長

**三浦 裕一** (58歳)  
消防団歴 27年 (農業)



## 農業の傍ら、消防人生27年

私が消防団に入団したのは、代々消防団をしていた祖父と親父の姿を見ていた事や、他の人からの薦めもあり入団しました。祖父から親父そして私と3代続いた消防団員家族だったので入ることについて何の違和感も無かったと思います。親父は、団で部長職でしたから親の手前もあって親父が辞めるまで入団しておりませんでした。消防団に入団して27年になります。いま私は、閑上分団の副分団長を拝命しています。閑上分団は、震災前は111名の団員が在籍しており、1部から9部に分かれていて部長が9名、班長が各部に2名ずついます。60歳代の団員は、全体の1割いるかいないかで機能別団員という言い方はせず一般団員として活動してもらっていました。高速を挟んで海側が1部～4部と9部で、内陸側が5部～8部に分かれていました。閑上分団の担当エリアの世帯数は、約2,550世帯かと思います。私は、もともと5部の出身です。団員の職業は、サラリーマンが多く、半数近くもいて昼間は勤務地が仙台など離れている人も多かったです。あとは、農業・自営業・商店などさまざまです。

閑上分団の消防装備ですが、小型ポンプ積載車が8台、救助資機材を積載した多機能型小型ポンプ積載車が1台、無線機は受信機能のみのものが部あたりに1台ありました。

## 震災前の消防活動

消防団としての年間行事は、年5、6回あって、その他に火災予防週間の際に地元の巡回をする程度でした。あとは、小型ポンプ車の点検を、月1回は必ず行ってましたから、団員はそのたびに集まっていました。団員の行事への参加率は、7、8割でした。

平成22年2月末のチリ地震津波の時は、地区の沿岸部分をしっかりやろうと考えたので、主に9部の団員が、防潮堤の水門を閉めて、その後住民への避難の呼びかけを実施しました。高齢者などの対応は、基本は町内会が行っています。消防団は、避難誘導と巡回をエリアごとに責任もってやっていました。当日の避難状況は、公民館と学校が指定避難所で避難した人たちは、半数くらいか



閑上分団1部の車庫



海岸部の水門

と思います。消防本部と消防団の関わりですが、ポンプ車の無線に連絡が入ります。また火災時の消火は、常備消防が消火栓を使って、消防団は川の水利を使って消火に当たっていました。

### 軽トラックで要援護者を避難させる

あの日私は母と一緒に自宅におり、約束があり出かけようと軽トラックに乗り込もうとした時に地震に遭いました。5、6分たち、地震の揺れが少し収まった時にラジオから流れる「津波が来る」という放送を耳にして、母を近くの親類の人に津波が来ることを話し、一緒に避難するようお願いして、第9部の詰所に向いました。

詰所に向かっている途中で増田川の水が引いているのが見えました。詰所に着いたのですが参集している団員が、1名しかいなくて詰所のシャッターが地震の揺れで斜めになっていて開けられませんでした。その後1人、2人が参集して開かないシャッターを壊して無理矢理ポンプ車を引き出して第9部の団員に水門閉鎖に走るようにと指示しました。私は、第9部の詰所に留まる訳にはいかなないので自分の軽トラックを使って避難の呼びかけをしながら閑上の町中に行きました。

1部から4部の沿岸部を1巡してから自宅に戻って、母親が避難したか確認してから、同じ道を辿って閑上の町中に行きました。閑上3丁目にある日和山（明治三陸津波の後に先人が作った高

台）のところで第4部と第9部のポンプ車に会ったんですが第4部の人たちには、すれ違った際に「気をつけて巡回してくれ」と声をかけたんです。第9部の団員は、ケアマネジャーから近くのアパートに寝たきりの人が2人いるので助けて欲しいと依頼されましたが小型ポンプ車に2人は乗せられないので私の軽トラックの荷台に団員1名が付き添ったうえで2人の寝たきりの人を乗せて、来た道に戻ったんです。戻っている途中で津波が襲ってくるのが見えました。私は、途中の五叉路が渋滞していたので、第9部のポンプ車を先頭にして避難所である小学校まで行き、学校脇の非常階段に軽トラックを横付けして、寝たきりの2人を学校に居た人たちと共に2階に避難させました。

津波は、足下まで来ていました。自分自身の足が車から離れると同時に津波が車をさらって行ってしまいました。本当に運が良かったと思っています。

閑上の町中ですれ違った4部のポンプ車と3名の団員は、津波の犠牲となりました。震災の津波で犠牲となった閑上分団の団員は、11名です。今回、地震の揺れで車庫のシャッターが壊れて開かなかったところがありました。そのためポンプ車を使えなかった部もありました。海沿いであって潮がかかるから錆るのが早いのです。

### 避難所で住民と一緒に救助活動

津波による浸水もあって閑上小学校にしばらく留まることになったんです。この避難所にいた団員は、5、6名だったと思います。そのとき学校の電柱にしがみついていた人がいました。ロープもないので学校にあるホースを結わいてから、そのホースを投げてその人をみんなで助けました。団員はわずかでしたから、避難所にいた地区の住民の方と一緒に助けたんです。

そのうちあちらこちらから「助けて」と悲鳴が聞こえるけど資機材も流されてどうしようもでき



震災直後の閑上



閑上分団第9部の消防資機材車

なかった。それから夜になるんですが、停電で電気もないので何も出来ない、ひたすら夜が明けるのを待っていました。津波が襲来してからいくつかのところで火災が発生していました。私の自宅も周りの4軒はすべて全焼でした。

翌朝には、自衛隊も入って道路も啓開されていたのでバスと残っていたポンプ車を使って館腰小学校体育館のほうに閑上小学校と閑上中学校にいる避難者を誘導しました。終わったのは、夜の8時頃だったと思います。翌13日からは、内陸他の分団の協力を得て行方不明者の捜索を始めました。

一日の捜索が終われば、自宅の後片付けに忙殺されました。私自身最初の2日間は、体育館で過ごして、その後は10日ほど弟の家にお世話になりました。今は家族とアパートに住んでいます。



捜索活動を行う名取市消防団

## 通信の確保は今後の課題

今回の活動で困ったことは、停電の影響もあって携帯電話が使えず、さらに消防無線機が受信不能であったことで全く外部と連絡が出来なかったことです。それは避難所にいる際も同じに必要な時に必要な人と連絡が取れないことが一番の問題です。活動中になんの情報も入らなかった。

それと閑上の人たちは、津波が来るとは思っていない。来ても貞山堀から1、2m程度だろうと思っていた。市のハザードマップがそうですから。だから今回の場合は、命を守るのは自分自身しかないと思っています。津波は来ないと日頃思っている、年に1回の避難訓練を実施したいと思っています。

## 消防団を続け地域を見守る

消防団に入ってどうかと聞かれても、いまは、非常に複雑な心境としか答えようがない。やっぱり人も少なくなるし入る人も少ない現状からすれば、しばらく続けて行くしかないと思っています。



# 的確な情報と適切な連絡の手段が 団員の命を守るために必要

宮城県岩沼市消防団

副団長

大村

昇 (58歳)

消防団歴 34年 (農業)



## 岩沼市の概要と被害状況

岩沼市は、宮城県の中央部、仙台市の南に位置。市域は、東西約13km、南北10km、総面積60.71km<sup>2</sup>を有し、人口2万1,526人、世帯数1万6,201世帯（平成24年2月29日現在）の都市であり、西部の山岳地域から東部の太平洋岸に至るまでなだらかに広がった平野が展開し、南部の市界には、阿武隈川が東流し太平洋に流入している。また、東北本線と常磐線の分岐点、国道4号と6号の合流点であり、さらに東北地方の国際化の玄関口となる仙台空港が所在するなど、交通の要衝である。岩沼市は、かつて「門前町」、「宿場町」として栄えてきたまちであるが、その後、「臨空工業地帯」の一角としての立地的優位性から大小の企業が進出し、工業都市の性格も加わり商工業



玉浦分団のポンプ車庫

都市として発展した。

岩沼市消防団は、団長および副団長で団本部を構成し、配下に岩沼分団（4部構成）千貫分団（7部と機動部）玉浦分団（11部と機動部）があり、団員の総

数は336名（平成24年3月現在）であった。消防装備は、ポンプ自動車をもととして1台保有し、小型動力ポンプ積載車は部ごとに1台ずつ配備されていた。その他の装備として携帯無線機が、部長以上に1台ずつ貸与されていた。

震災による消防団の人的被害は、死亡者6人であり、物的被害は、玉浦分団の5箇所の車庫が全壊流出し、3台の小型動力ポンプ積載車も流出した。住宅被害のうち消防団員に係る被害は、全壊65棟、大規模半壊23棟、半壊18棟であった。3月11日から7月3日までに活動した消防団員は、延べ1,160名に及んでいる。3月末までの消防団活動状況は、火災消火活動2件、遺体搬送を含む救助数者は662人、救急活動となっている。

大震災によって岩沼市では、市内で震度6弱の揺れを観測した。岩沼市は、14時49分の大津波の津波警報の発令を受けて、広報車等を使って避難の呼びかけを実施している。その後遡上する津波が、15時25分頃に阿武隈川河口付近で市の広報車に乗った職員に目撃されている。

津波による市の人的被害は、死亡者181人、行方不明者1人、負傷者293人であった。また住宅被害は、全壊688棟、半壊1,477棟であった。

## 操法大会の補充要員として消防団へ

私が消防団に入団したのは、当時の玉浦分団第



玉浦分団第3部の消防車両

9部は団員が12名で操法大会に参加するには若手団員が少ないということで急遽勧誘を受けたのがきっかけでした。昔は消防団員になるのは大変で定員漏れがない限り入れない狭き門でした。親父も消防応援団のような立場で活動していました。担当エリア内の住居は、約42世帯ですから、それに対し14名の団員は多かったかもしれませんが、海と阿武隈川河口部に挟まれた地域で日頃から水害や高潮もあって出勤頻度も高く人数的には釣り合いがとれていたと思います。玉浦分団は、旧玉浦村エリア内の1,800~2,000世帯を担当し、団員は175名で、11部と機動部を持っています。私は、ここ玉浦地区で生まれ育ち、消防団に入ってから33年になります。2年前までは、玉浦分団の分団長を務め、昨年、岩沼市消防団の副団長を拝命いたしました。

家業は、玉浦で野菜の生産と販売をしており、自宅敷地内に「おおむらファーム直売所」を設け生産直売をずっとやっています。家族は、家内と息子夫婦と孫一人です。

## 震災前の消防活動

消防団としての活動は、消防活動以外に夜警や訓練などがあり、また、年4回の分団会議があり原則班長以上の出席となっています。土地柄もあって海岸線は不審火が多く、松林の落ち葉や枝に放火する人がいます。今は、岩沼市消防団団長の

もと、副団長という立場で現場の統率や指揮を行っています。

## 角田市のスーパーで揺れに遭遇

3月11日ですが、畑でとれた野菜を自家用トラックに積んで角田市のスーパーに納めに行っていました。あの大きな揺れで「これは駄目だ!」と思って、一端自宅に戻ろうと考え20分ほどかかる道のりを急いで戻りました。途中で角田大橋と亘理大橋を通ってくるのですが、亘理大橋を渡っていた時に海を見たら、引き潮で海水がなくなっていました。海の状況を見て津波が来ると直感し、真っ直ぐに自宅に戻り活動服に着替えて、野菜を満載にしたままで消防本部へ向かいました。家族については、家に車がなかったので逃げたんだと思いました。息子の嫁は、空港近くの美容室に行っていて、家内と息子については、孫の小学校が避難所なので学校に行ったと思っていました。そのときは、家族が九死に一生の経験をする事になるとは、考えもつきませんでした。家族は無事だろうと考えていたんです。

## 消防団本部で孤軍奮闘、そして3日間の指揮

岩沼市消防本部に着いてからは、消防指令室にずっと詰めていました。翌朝の5時近くまで殆どひっきりなしにかかってくる緊急電話の対応で手一杯の状態でした。というのも地震の揺れで東北電力が停電しており、停電時に対応するはずの予備発電機も立ち上がりませんでした。燃料の圧送部分が地震で故障したようです。その影響で消防本部のモニターや設備が使えませんでした。使えたのは一部の電話とバッテリーで動く無線機くらいでした。本部職員も被災現場に直接出動せざるを得なく、残っていたのは消防長と私だけで、消防長も市の災害対策本部に詰めることになって私



瓦礫と化した消防車両



海沿いに搜索活動を実施

が連絡対応や消防現場の指揮を行いました。市民から救急搬送や救助の要請などが入るのですが、「がんばれ」というだけでどうしようもありませんでした。災害状況等の記録は署にあったホワイトボードの表裏を使ってびっしり記録しました。

携帯無線機を持っていた団の部長とは連絡は取れていましたが、そのうちバッテリーが切れると使えなくなってしまいました。結局、本部に張り付いたのは3日間で、消防団の状況が分かり始めたのは2日目くらいからです。その日には、空港の近くの美容室にいた息子の嫁が消防本部に裸足のまま来ました。親父は本部にいるだろうと思いき、来たということです。その頃家内が低体温の状態助けられ、病院に運ばれたらしいということを知りました。

## 消防団員 避難誘導中に6名殉職

今回の津波で玉浦分団の団員6名が帰らぬ人となりました。私が所属していた分団だからみんな良く知っている仲間でした。いずれも部長・班長の責任感のある仲間です。4名は、寝たきりの方を避難させようとして津波に巻き込まれ、2名は避難の呼びかけをしているときに津波に襲われたと聞いています。亡くなった人は、消防が大好きな人たちが操法大会にも熱心に取り組んでいました。実はその家族は助かっています。奥さんたちには、「先に避難しろ！自分たちはもう少し活動

する」と言っているんですね。私たちの地区も津波の犠牲となった人は、避難の説得に応じなかった人でした。そうは言っても靴とかサンダルを履いた状態で見つかったので、最後は逃げようとしたんでしょう。多くの人は、逃げているんです。10分も歩けば高台に行ける場所であっても逃げない人もいた。「津波は来ない。1年前のチリ地震津波の際は来なかった。護岸がしっかりしているから大丈夫だよ」とか言われていたようですから。今回のことを振り返ると団員を殉職させないためには、危険なところには行かない、あるいは1回呼びかけて応えなかったら逃げるしかないと思っています。今回、そういう行動がとれていたら、いつまでもそこにいてヘルメットや帽子をかぶったままで車の中で亡くなることはなかった。それを徹底させてればと悔やむところです。

## 九死に一生の家族の体験

私が消防本部で悪戦苦闘している時に、家内と息子そして孫は津波に巻き込まれていたんです。地震の揺れの後、自宅にいた家内と息子と孫は、3人で車にのって避難所である中学校に逃げたんですが、自宅に愛犬を残してきたものだから、一端自宅に戻ったんです。それで自宅に愛犬を乗せて出ようとしたところに津波が遡上して来たんです。津波から追われるように急いで車を走らせるのですが、追いつかれてしまって車ごと流されて





搜索活動前の打ち合わせ

しまいました。途中で電柱にぶつかって窓ガラスが割れて3人は車から脱出し、息子は孫を抱えて泳ぎ途中で流れてきた屋根に子どもを乗せて自分も這い上がったようです。家内は、泳げなかったから犬と流木に掴まって2時間くらい水に入ったままで、地元の人がトラクターで舟を運んで、家内を捜していた息子がその舟で家内を助け出したようです。2時間も寒い中浸かっていたものだから低体温症になって救急搬送されて一命を取り留めたんです。いま自宅で助けた愛犬と暮らしていますが愛犬もあのことはなかったようにのんびりしています。自宅に戻らなければ九死に一生の経験をするとはなかったと思いますが、戻って犠牲になった人たちの理由は同じようなことかもしれません。

### 津波から消防団員や市民の命を守るためには

実は、団員の中にも危険な状況下にあった団員は沢山いました。やはり的確な情報を出す、あるいは出せる環境を作るということと、適切な連絡手段の確保が消防団の命を守るために必要なことだと思います。また今回の教訓を忘れないように後世に残すことだと思います。

それと日頃の訓練を、形式にとらわれず実際の災害時のことを考えてきちんと行うことです。自主防災組織も作ったけど実態に即した形にしていなかったことが問題だったわけです。



集落が消失し岩沼市北部の相の釜地区。  
左の建物は原型を留める相の釜水防倉庫

### 犠牲となった団員を称える

今回の津波に勇敢に立ち向かい犠牲となった団員を称え、名前を記憶に留めることが必要と思っています。

震災当初の頃に、カウンセリングの話がありました。団員の多くは、半年経ってまだ相当の錯綜があると思います。今年、団の行事を中止しました。被害等、何もなかった人から「どうして」と言われましたが、現場にいる人たちは、両親を失い、同僚を失って気持ちを整理するにも出来ない。今だって人によっては、家もない女房もないところでボーっとしている人もいます。「がんばれ、がんばれ」と言われるけどそれだけでは難しい、そういう環境に団員がいることを理解してほしいです。

### これからも、出来ることは精一杯やる

思い返せば消防団に入って良かったと思っています。大変なことはあるけど出来ることを精一杯やっていくことが自分としては生きて行くことだと思っています。

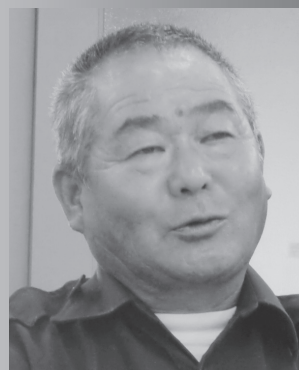
## 積極的な避難を徹底すべし

宮城県亶理町消防団

吉田分団 分団長

平間 英一郎 (62歳)

消防団歴 38年 (農業)



### 亶理町の概要と被害状況

亶理町は、宮城県南部の太平洋沿岸、阿武隈川の河口に位置する町である。温暖な気候を利用した果樹・花卉栽培が盛んであり、特にイチゴが名産である。イチゴの生産で出荷量が東北地方第1位であり、またリンゴの生産でも出荷量が宮城県第1位である。工業は地場食品加工業と自動車関連企業が主なものである。総面積は、73.21km<sup>2</sup>で人口3万4,234人、世帯数1万1,281世帯（平成24年1月31日現在）。

亶理町消防団は、本部と配下の亶理分団（4部）、荒浜分団（3部）、吉田分団（3部）、逢隈分団（3部）の4分団、13部構成で団員総数は496名（平成23年4月時点）であった。消防団の消防装備は、ポンプ車4台、小型動力ポンプ付積載車36台で無線機は団として保有していなかった。津波による消防団員の人的被害は、死者2名。

3月11日の震災当日、亶理町では震度6弱を記録し、役場庁舎が損壊した。その後の津波によって町の面積の約48%が浸水し、荒浜・大畑浜・吉田浜・長瀨浜など沿岸の地区が壊滅的被害を受けた。東日本大震災では、震度6弱を観測した。人的被害は死者257人、行方不明者12人、負傷者45人、住家被害は全壊2,298棟、半壊1,055棟となっている。

### 親の強い薦めで消防団へ

私が消防団に入るきっかけですが、たしか23歳から24歳で結婚したばかりの頃に地元の消防団が2つに分かれて、団員数が少なくなることで若手の団員が必要だということで誘われたんです。私自身は、気乗りしなかったんですが、再三の勧誘と親父の強い薦めがあって地元の吉田分団に入団することになったのです。親も爺さんも消防団経験者ではなかったのですが、昭和35年のチリ地震津波か伊勢湾台風の際に親父ら家族が消防団に助けられたということで息子は消防団に入りたいと思っていたようです。

実は、亶理町の消防団というのは代々教えが厳しいと聞いていたし、実際に軍隊経験のある人も



強い揺れによって役場本庁舎は、被害を受け危険建物となった



沿岸部の搜索活動

居たので訓練は厳しかったと。そんなことを聞いたので入るのを躊躇しました。しかし本当に厳しかったですね。若いときは、遊びたいということもあったけど、そのうち火災で救った人からお礼を言われるとやって良かったんだと思うようになりました。

私が入団した当時ですが頻繁に火災はありました。冬場は多い週には2回はありました。家内からも「疲れているのにそこまでやらなきゃいいのに」と反対もされましたが、今はその家内にも応援してくれています。しかし遠地津波になると1日～2日も拘束されるから結構大変なんです。

## 吉田分団で38年

今私が分団長をしている吉田分団は、団員が142名で団長1名、副分団長1名、部長が6名います。分団長、副分団長は指揮所にて部長以下が消防活動をします。吉田分団の担当エリアは、鳥の海から山元町～角田市までで旧吉田村が吉田分団です。かなり広いエリアを担当しています。担当エリア内の世帯数は、約2,000世帯。分団には1部、2部、3部があり各班に軽トラックタイプの小型ポンプ積載車が合計10台とポンプ車1台が消防装備として配備されています。無線機はなく連絡は個人の携帯電話に依存していました。

142名の団員の中でサラリーマン団員は、半数近くになります。勤務先は、半分は隣接市町村です。その他は私のように農業が多く、漁業関係者

はいません。もし何かあった場合は、最低限ポンプ車が出動させることができる団員は、地区内には何人か居ます。

## 震災前の分団の活動

日頃の消防活動は、訓練や夜間警戒を入れると年間に10回以上にはなります。

平成22年のチリ地震津波の時は、大津波の津波警報が発表されてから、我々消防団は吉田支所のフロアーを対策本部にして、参集可能なものは集まりました。日頃からマニュアルがあって役割が決まっていました。

浜通の団員は、震度4以上になると水門の閉鎖操作を行うようになっていました。閉鎖操作を行う水門は、人が通れるほどの水門が4箇所、車通行用の大きめの水門が1箇所でありました。締め終わったら地区内のブロックの倒壊などを確認し本部に集まっています。浜通では主要箇所に団員を立てて避難誘導も行わせました。

これまでは、マニュアルどおりにやってましたが今回は逃げない人もいたので団員が犠牲になったところもあったと聞きました。この地域の一次避難所は、吉田支所と長瀨小学校の体育館です。吉田浜、大畑浜、長瀨浜等の地区の人が逃げる場所で、浜通りの人たちは9割は避難しましたが、内陸部の人はあまり避難していなかったと思います。多くは、車での避難であったようです。



中央に水没した建物の屋根がかるうじて見えている





消防隊との綿密な打ち合わせが続いた

## 強い縦揺れに津波を確信

3月11日は、吉田浜地区の海岸近くにある自宅にいました。一緒にいたのは、家族4人です。孫は、小学校に行っていたのでいませんでした。私の母親も町内のデイサービスに行っていて、自宅にいたのは家内と息子夫婦でした。

14時46分の最初の揺れは凄かった。あんな揺れの経験は初めてでした。宮城県沖地震よりも強く私の目の前で2t車が縦揺れで30cmくらい飛び上がりました。もちろん立ってられませんでした。前兆もなく、「ゴゴ」と来て「ドン」と揺れました。

揺れが収まってから3、4分後にテレビで大津波警報を確認してから、自分の部屋に行って活動服に着がえ、家族に避難しろと言って車を出そうとしたら車の前に自宅のブロックが倒れていたのので畑を回ってから出ました。その後、停電しました。私以外の家族は、各自で車を出して、長男は孫を学校に迎えに行き、嫁は避難所に向い、家内は婦人防火クラブ吉田浜南区の役員をしているので車で地域を巡回して途中で鮎やのおばあさんが腰を抜かして動けなかったのので車に乗せて避難させたようです。

## 消防団詰所で指揮が始まる

私は、支所の消防団の詰所に向かいました。団員が集まったのは、10分立たなかったと思います。早く来た者から避難誘導をさせるように指示

して、消防車で避難経路に団員を配置させました。水門閉鎖操作には、6名が向かいました。彼らは、支所に戻る途中で避難誘導している団員と合流したようです。津波6mの情報は、ラジオからたまたま聞いたので知っていました。とにかく人命が第一だから団員を避難させました。携帯電話は通じないので何人かで分散して車で団員の撤退を呼びかけさせました。

避難の呼びかけはいろんなことがあったようです。地区によっては、道路から内側は津波は来ないだろうと思っていた人も多く逃げなかったところもあったようです。そのほか津波が来るまでに1時間近くあったのでイチゴ栽培をしている人たちがビニールハウスの様子を見に戻って犠牲になった人もいました。中には「絶対津波は来ない」とがんと動かない年寄りもいました。けんか腰で避難させて後から助けてもらってありがたかったと感謝もされました。

亘理の人は、阿武隈川があるので津波は川を上って内陸まで津波は越えてこないと思っている人が多かったことも事実です。さらにチリ地震津波の際も来なかったから大丈夫だと思っている年寄りも多かったです。

吉田分団の担当エリア内の津波犠牲者は、100人強でした。県道相馬亘理線よりも内陸側は逃げない人がいてかなりの犠牲者が出ました。その日、吉田分団からは、70名くらいの団員が参加したと思います。

津波に巻き込まれた吉田分団の団員はいませんでした。



瓦礫の山の中に収穫したイチゴを入れる箱が散乱



建ってはいるが、1階部分が津波に根こそぎ持っていかれてしまった宮城県漁業協同組合亙理支所

### 避難所で浸水孤立～救助・救護活動～

救助・救護のため長瀬小学校にいた消防団員が流れてきた舟を使って浸水域内の30人近くを助けました。地区内では、19時少し前から20時過ぎに火災が発生しました。しかし浸水エリア内で水があったので消火活動は出来ませんでした。翌朝6時頃には寒い中で食糧確保するために孤立した避難所の近くの線路まで役場から食料を運んでもらって、避難所にいた支所300人と小学校にいる200人の為に舟で食糧を搬送しています。そして、孤立避難所から地域の住民を移動させるために団員は、舟や支所内のテーブルを繋げて応急の渡橋を組み上げてバスまで誘導し逢隈小学校の体育館まで避難させました。また吉田小学校の避難所では団員が炊き出しを手伝ったりしました。

避難した住民を安全な避難所へ移送させた後に次の日から行方不明者の捜索を行っています。その後、遺体捜索は4月29日まで続きました。団員の多くは、遺体捜索に協力していましたが会社が復旧してからだんだん減っていったことも事実です。

消防団活動から被災者生活に移行出来たのは仮設に入った6月末頃でした。

### 積極的な避難を教訓に

震災後、バッテリーの利く間は、携帯電話の通話は駄目だったけどメールはなぜか分からないけど使えました。

住民を津波から守るために必要なことですが、何よりも住民の心がけが重要だと思います。それと積極的な避難です。それと消防も人間だから危険を感じたら逃げる事が重要だと思います。

自分を犠牲にして人を守るのは限界があると思うんです。今回も軽トラックの上に低体温状態だった人を若い団員がカーテンを体に結びつけて身を挺して助けました。結果的に両名共に助かりましたが、身の危険を冒してまで救助させたことは分団長として迷うところです。

### 必要な装備は

今回の活動の中で必要な装備は、救命ボートと長めのロープ、カッパや長靴、防寒着は必須でした。一晩濡れたままで寒い中で過ごすのは大変でしたし、救助などで濡れた状態で屋外で過ごした団員もいました。あとは懐中電灯です。それと大きな問題として無線機がなくて非常に苦労しました。日頃は携帯電話が使えるが非常時を想定した連絡手段が必要であると考えます。いざというときに使える防災装備品が重要だということです。

### 消防団員であることを誇りに思う

今は誇りに思ってます。今回のことも含めます入って良かったと思います。

団員に助けられたと多くの人に言われたことが今は糧になっています。

# 毎年6月の避難訓練の効果が 活かされた

宮城県亶理町消防団  
荒浜分団 分団長

**島田 金一** (62歳)  
消防団歴 31年 (自営業)



## 祖父は消防団経験者

私の祖父は、昭和30年代まで荒浜分団で副団長を務めた人でした。昭和53年から荒浜で共同経営のスーパーを始めた際に、消防団へ入らないかと亶理の副団長から誘いがあったんです。仕事も始めたばかりだったので、1年間保留していましたが2年目に入団しました。33年間も消防団活動をするとは思っていませんでした。

自宅は、阿武隈川河口堤防のそばに店舗兼用で家内と2人で住んでいます。

荒浜分団は、阿武隈川と海に挟まれた地域を担当地区にしており、第1部～第3部と部の配下に班が構成されています。総数87名で分団長1名(私)、副分団長1名、部長7名、班長9名で統括しています。消防ポンプ車が1台で小型動力ポンプ積載車が7台あって団の消防装備が主なものとなります。車庫は、第1部～第3部ごとにポンプ積載車用としてある程度で屯所や詰所的なものではなく、何かあると荒浜支所が消防団の集合場所になっていました。その他無線機は、ありませんでした。年に一回の訓練時に役場から一時的に借りて運用していた程度です。

分団の年齢層は、20歳代半ばから60歳代まででしたが、実は震災前に仕事の関係で一度退団した人が再入団して来たんです。その方は、73歳でしたが退団した時点で副団長まで勤めた人で班長の

推薦もあって幹部会議で本人の熱意とポンプ車庫の近くに住んでいることもあって再入団を認めました。今回の震災で唯一犠牲になった団員は、その方でした。

## 震災前の分団の活動

日頃の消防活動は、阿武隈川と海岸線に囲まれているので訓練や夜間の警戒も含めると出動回数は、多くて20数日もありました。

平成22年のチリ地震津波の時は、町内の巡視・避難誘導や海面監視を行っていました。あのときは、津波が来るぞといわれながらも来たのは、50cm～60cmでしたから。今回逃げなかった人が居たというのもその時のチリ地震津波のことがあってだと思います。



全てを津波がさらってしまった



消防団としての水門の操作はありませんでした。以前河川の堤防に角落としの水門があったのですが改修で撤去されました。海にも水門はありますが、漁協や土地改良区が操作していたので消防団として担当する水門はありません。

## 確定申告中に揺れを体験

あの日は、確定申告中で亘理町中央公民館にいて順番待ちで並んでいました。最初の大きな揺れから2回目の揺れの途中で直ぐに外に出て、自家用車で急いで自宅に戻りました。戻る途中で避難のために地域から外へ移動している車とすれ違いました。この地域の人たちは、昭和35年のチリ地震津波を経験しているので阿武隈川の水が引いたら津波が来ると思っていたのです。自宅に着いた時間は、15時でした。自宅には、家内がいたので直ぐに荒浜小学校に避難するように伝えて消防団の参集場所である荒浜支所に移動しました。移動中に堤防上に20人～30人の見物人がいたのを確認しています。あとで避難の呼びかけをした団員から聞いたことですが、堤防上の人たちは、1波目までは居たらしいです。2波目が来て「これはやばい」と思って逃げ出したようです。「津波が来るから逃げてくれ」と言っても「大丈夫」だという人もいたようです。その人は助かっていないでしょう。

## 荒浜支所で陣頭指揮が始まる

ちょうど15時5分頃で団員は、1名～2名来ていました。それから次々に参集する団員に津波が来るからといって避難誘導するように指示しました。すでに一帯は、停電してましたがバッテリーのある防災行政無線は、荒浜小学校と荒浜中学校への避難を呼びかけていました。

支所に集まった団員は、13名です。荒浜分団は87名ですが、そのうち7割はサラリーマンですか

ら平日の日中に地区にいる団員は限られます。他にも地区内に団員は居たと思いますが班の中で活動した人もいたと思います。

その時に6台の小型ポンプ積載車があったので2人ずつ乗せて避難誘導や避難しない住民への呼びかけを徹底させました。1巡するのに10分ですからそのたびに逐一報告させていました。地域には災害時要援護者もいたので区長と係そして団員が一生懸命呼びかけて避難させたようです。要援護者も早く逃げた人と残っている人と両極端だったようです。避難所までは遠いですから車での移動は必須だったと思います。

結局、津波は、避難所である小学校・中学校の2階まで浸水させましたから3階以上に避難しないといけませんでした。津波が支所を襲う直前に団員4名を出動させようとしたら、「津波が来る！」といいながら支所に逃げ込んだ住民を追うように津波が来たので団員も逃げ込んできました。

津波が襲ってきてから津波が木造家屋を運んで来るんです。私たちがいる支所の建物に立て続けにぶつかってきました。次々に漂流物がぶつかってくるのが時間にすると5分程度だったと思うのですが、15時50分頃に急に流れが止まりました。後で分かったことですが別の方向から来た津波とぶつかって一時的に滞留したようです。それがなければ支所にいてもどうなっていたか分かりません。



陣頭指揮をとった亘理町荒浜支所



自衛隊のヘリによる救助活動

## 様々な住民避難

団員から聞いた話ですが「2階にいれば大丈夫」「自分の家は間違いなといた老人」「一度避難して家族が心配で戻った人や避難所も寒いので防寒着や毛布を取りに戻った人」「地区内の工場で揺れの後に設備点検に30分かかり、それから自宅に戻った人」様々であったようです。

車で避難する人が多く、逃げる途中で渋滞に挟まって身動き出来なくなった人たちも多かったようです。車に乗って流された人も車が浮いて漂ううちに物に挟まって助かった人も多くいたようです。

## 避難所からの救出劇

津波の襲来が一段落したら水は直ぐに引かないので、この地域は孤立してしまったので。私たちがいた荒浜支所は、消防団員・役場職員・避難してきた住民で総数70数人がいました。荒浜小学校には850人、荒浜中学校には650人ですから約1,400人は避難所にいたと思います。この地域の日中の人口3割から4割です。翌12日から孤立した避難者の救出が始まりました。12日の午後から支所から見える荒浜小学校の850人（200人は小学生）の救出劇です。まず被災しなかった逢隈分団が小学校から堤防までの誘導路を啓開して、浸水

したところをおぶって堤防まで引き上げたんです。最終避難所の逢隈小学校までをバスが横付けできるところから運びました。

お昼頃には、自衛隊が入っていたので荒浜中学校については園児を助けるために、ヘリを使った救出劇が始まってました。13日の朝から自宅に残された住民の救出が行われていたんです。

我々がいた支所も12日のお昼に自衛隊が舟で来て緊急を要する透析患者とショック状態の高齢者をその日のうちにヘリで救出してくれました。

私たちが流れ着いた大きな水槽をボート代わりにして陸に上がることが出来ました。

## 団を再編成して行方不明者捜索へ

13日からは二次避難所である逢隈小学校に避難していた団員が30名近くいたので荒浜分団と逢隈分団が中心になって救護隊を編成し15日まで活動しました。

その後、逢隈小学校の音楽室を消防団の詰所に開放してくれたので、そこを寝泊まりの拠点にして50名～60名の編成で1か月くらい活動しました。朝7時から夕方17時まで活動を続けて3月20日までに6割は捜索できたと思います。そういう消防団生活から被災者に移行出来たのは5月の連休頃でした。

## 6.12の津波避難訓練の取組が活きた

3方を水に囲まれた荒浜地区で津波の犠牲者が約140人であったのは毎年6月12日に実施していた津波避難訓練の効果があったと思っています。実は、ここ数年ですが荒浜小学校・中学校に集まる訓練をしていたんですが校庭ではなく校舎内に入るのが実効的な訓練だったんです。平成22年のチリ地震津波の時は、体育館に避難しました。その際の反省会で数メートルの大津波警報で体育館に避難するのもおかしいとの意見も合ったんで



行方不明者の搜索活動を行う荒浜分団と逢隈分団の団員たち（住民撮影）



避難所から見た津波の襲来（住民撮影）

す。訓練の参加者は11区で30人ずつで約300人はいました。少なくとも自治会長は出ていたので良かったと思いますね。

22年は、荒浜・吉田・亘理の人たちを亘理小学校に集めました。500人近くが参加し車避難の渋滞を経験した方もいると思います。

避難率は高かったと思いますのでこのような日頃の取組が活きたと信じています。

## 命を守るために

消防団の命を守るために必要なことをいいたいと思います。

結果的に1名の殉職者が出ました。この方は、奥さんを安全な亘理の実家へ送り届けてから荒浜に移動し活動しているところで津波に巻き込まれたと聞いています。残念なことだと思います。今



浸水被害の状況

回の活動からいえることは、支所を拠点にして行って返ってくる指揮命令系統にしたのが良かったと思います。消防装備の充実は、必要なことですが厳しい状況下で如何に組織を統率するかが一つの課題だとも考えます。

また住民の命を守るためには、日頃の訓練は毎年励行することも含め、地域に伝承として残すことが必要だと考えます。そのためにモニュメントはずっと残る物ですからあったほうがよいと思います。

それといざというときは、安全な公共施設へいち早く逃げる事、そして逃げたら動かないこと、それと昔から使っている半鐘など停電でも明らかに伝わるものがあると違うと思うんです。いいものは残して行くべきです。

## 分団長として団員に感謝

個人的には非常にしんどかったけど皆さんに感謝されることは消防団冥利につきるものです。

体調的に難しい時もありましたが今回の消防活動に献身的に活動してくれた団員みなさんに感謝したいと考えてます。



## 多くの生命とイチゴ・ホッキ貝を奪った津波の壁

宮城県山元町消防団  
第6分団第1班 班長

**岩佐 隆彦** (55歳)  
消防団歴 20年 (農業)



### 山元町の概要と被害状況

宮城県亘理郡山元町は福島県との県境に位置し、面積は64.48km<sup>2</sup>、人口1万6,608人（平成23年3月1日現在）の農業を主産業とする町である。温暖な気候を利用したイチゴやりんご栽培は宮城県内でもトップクラスの量、品質を誇っており、太平洋に面する東部に水田・畑作地帯が多い。山元町の消防団は、7分団25班に360名が所属しており、被雇用者（サラリーマン）が267名（74.2%）と多い（平成23年4月1日現在）。

3月11日の大地震では、震度6強を観測し、14時49分の大津波警報を受けて、消防本部では14時52分に避難指示を沿岸部2,494世帯に対して伝達（町災害対策本部が確認）、約1時間後の15時50分頃、大津波が襲来した。海岸沿いの2,494世帯、7,543人（人口比で45.4%の被災率）の区域が津波により水没、海岸線から1.5kmの範囲ではほとんどの建物が流出、海岸線1.5kmから国道6号線の範囲では、床上2m程度まで浸水した。

人的被害は、死者671人、行方不明者19人、負傷者90人である。人口に占める死者・行方不明者の割合は、4.2%となっている。住家被害は、全壊2,333棟、半壊1,095棟だった。火災は発生しなかった。災害発生から4日目の3月14日に避難者数がピークに達し、避難所は19箇所開設、避難者は5,826人（人口の35%）となった。

### 西陽に真っ赤に映えた巨大な津波の壁

3月11日は寒かったので、イチゴ栽培のハウスの二重カーテンを落とす作業をしていた。地震で揺れる前からドドドゥーと地響きがした後、3回くらい大きな揺れが来た。2回目の揺れが強く、たまたまハウスの柱につかまった。目の前の電信柱は斜めに傾いた。揺れが収まってきたところで自宅が心配になって車で向かったが、農道の道すがらいたるところで液状化が起きており、ブクブクとセメント色の水が吹き出していた。自宅では、嫁がブレーカーを切り、ガスの元栓を締めており、母や親戚の叔母と共にすでに避難していた。

その後、消防法被を着て、海から400m～500mの所にある屯所に向かった。屯所には消防団のポンプ車を置いてあり、ここからは海は見えないが、ポンプ車のラジオで、大津波警報が出ていると聞いた。最初は津波の高さの予想は3mだったのが、7mや10mに変わった。町から防災行政無線で大津波警報を伝えていたらしいが、隣の地区は鳴らなかったという。自分の住む笠野地区では区長が手動で鳴らしたそうだが自分は聞いていない。

この時点では、津波が来ると思わず、夕方から隣組の人のお通夜もあるし、どうなるのだろうと思いつつ、指示されているマニュアルどおりに、海沿いのルートを「大津波警報が出ていま

す。避難してください。」とポンプ車のスピーカーで呼びかけて回った。区長も呼びかけていたが、呼びかけても住民達は半信半疑のようだった。この頃はまだ地区内に緊張感がなく、「頑張れよ〜。」とこちらに手を振る人や、自宅から外に出てこない人、地震で壊れた物の片付けをしている人、畑に戻った人などがいた。声をかけても、頑として動かない人もいた。結構、津波が来るまでに時間はあった。団員と一緒に広報で決められたルートを2回回り、工事現場にあるカラーコーンなどを使って立ち入り禁止区域の設定を行ったりした。後で考えると、震災の前々日、3月9日に出た津波警報がなければ、もっと本気になれたはずで、残念でならない。その時は警報が出た後3時間ほどで解除、津波なんてそんなものだからにしか思っていなかったのではないと思う。

そのうち、ラジオで女川に津波来襲や、仙台飛行場浸水のニュースを耳にした。これを聞いた頃から本気になった。津波が10mとなると間違いなく、“ここにも、津波が来る！”一転して、必死にマイクで「とにかく逃げろ、逃げろ〜！」と大声で騒いで回った。

海を見ていた消防団員から、「水が引いた。」という連絡が来てから2分くらいで、津波が来るのが見えた。500m先から津波が来るというのは気持ちの良いものではない。速さはそれほど速くは感じなかったが、第1波は、南から来た。バリバリバリッという音がして辺りが暗くなった後、西陽を受けて、津波が一瞬赤く映えた。後方に見えるハウスが流されてしまう…と思う間もなく、ものの1分かそこらで流されてしまった。自然には勝てない、と思った。16時過ぎ頃だろうか、第1波から3分かそこらで、第2波が北から松林の上をゴウゴウと音を立てながら、壁のようになって回り込むように押し寄せてきた。真っ黒で気持ち悪かった。携帯電話のカメラで津波を撮ろうとしたが、手がぶるぶる震えて撮れなかった。

「津波が来るー！」と叫びながら役場の方へ向かって消防車で走って行くと、対向車線を海岸の



瓦礫の中で見つかった他の班の消防車

方に下りようとする人がたくさんいた。車で移動している人は津波が来ているのがよくわからなかったようで、マイクでは聞こえないかもしれないと思い、クラクションを鳴らして警告した。自分の後には、今まさに襲ってくる津波が見える。津波が来るのに気づいた3台の車はすぐに引き返した。この第2波と第3波が最大の致命的な被害を招いた。首まで水に浸かって助けを求める人、屋根の上に登った人や車に閉じ込められた人かと思うが、親戚の人が「助けてー」という声を聞いたという。

## 人の生命を奪った津波

人的被害は、海側より中の地区の方がひどかった。死者670人のうち約40人は、線路の近くの地盤の高い方が亡くなっていた。ふだんの水害でも浸水する“すり鉢型”になっている地区では、50人が亡くなった。また、80~90歳の高齢者は、津波は来ないと思って海を見に行き、犠牲になった。昭和35年のチリ地震津波では、山元町では海のそばに水がたまっただけで、津波が来るのは三陸の方だと思いこんでいたからだった。自分の住む地域は壊滅状態だ。人口750人のうち、亡くなった人が45人近くいる。隣の新浜地区は人口約250人のうち50人ほど亡くなった。私の近所では、1家族は避難せず、4世帯で9人亡くなった。時間の余裕があったのが逆に悪かった。

自分の班の団員17名のうち、当日は10名が参集し、1名が亡くなった（祖父、妻、子どもを一旦

避難させた後、子供の服などを取りに戻り、親子で流された団員だった。

消防車で広報していた消防団員は、逃げ切れた人が多いが、団員1名が津波にのまれて亡くなった。瓦礫の中で見つかった他の班の消防車は、痛ましかった。消防団は団結力というが、今回はどうしようもなかった。団員の電話番号を控えているが、連絡もできなかった。

## 当夜から安否確認し、4人を救助！

私達が津波から逃れて役場に行くと、庁舎の前が災害対策本部になっていて、消防の本部は自転車置き場に作られた。ここを詰所として、津波の広報から上がってきた消防団員達は、恐怖と疲れもあり、気が抜けたように、最初何をやるわけでもなく、火を焚いて体を暖めたりしていた。火があったので、人が集まってきて、その中に民生委員や町会議員も来ていた。

消防団活動どころでなく、家族のことが心配で、皆が安否確認をしていた。団員と連絡がつかず、探しに来る人や、妻が行方不明の人など、個人的に捜している人もいた。電話が通じず、大変だったが、津波で被災した人達も、足（車）がないから連絡が来ず、仕事もない。避難民みたいな感じで惨めだった。私の家族は、友達の家でお世話になった。

2日目も津波警報が出たままなので、浸水域に近づけなかった。要請があれば行くが、どこから手をつけたらよいかわからない状態だった。せっかくいるのだから、誰が残っているのではないかと、人捜しにでも行くかと、自主的に、消防法被を着て、トビヤスコップなどを持って見て回った。消防車はあったが、道路が整備されていないから大変だ。1時間半ほどかけて海側まで行くと、水と瓦礫、遺体や車がある中に、1晩を家の2階で明かした親子4人が見つかった。おばあさんは動けなくなっており、戸板に乗せて国道近くまで、普通なら20分くらいで歩けるところを、瓦

礫の山の中を、時間をかけて救助した。消防無線で救急車を要請し、病院に連れて行ってもらい、助かった。

運がよかったのか、山元町では出火しなかった。日頃の防火活動の成果か、2～3日後に団長命令で、ガスの元栓が閉まっているかを確認して回ったが、ほとんどが閉まっていた。2日目からは避難所で寝泊りした。

## 本格的な搜索活動

3日目ぐらいから、本格的に搜索活動が始まった。基本的に自衛隊と、消防署が搜索し、警察が検視して、自衛隊が安置所へ搬送する。搜索は、浸水被害にあった消防団の第4・5・6班の地区で行われた。津波が浸水しなかった国道から上の消防団の班は被害があったが、応援に来てくれた。「遺体にさわらな」と言われたので、消防団は遺体を確認してくるだけだ。連絡係は本部で担当したが、個別に携帯にも連絡が来た。連携はとれておらず、団長の指示に従うだけで、上の方がどうなっているのかわからなかった。

笠野地区では、連絡網がないので、地区役員が避難所で町内の住民の安否を確認したり、行方のわからない人を震災後に見たかどうか、電話で確認したので、当初80人くらいいた行方不明者が徐々に減って、40人くらいになった。

消防団は、外部から来た応援隊の道案内をした。自衛隊は、統制がとれていてすばらしい反面、事務手続きなどが面倒で、次の行動にうつる時は「待って下さい。」と、融通がきかなかった。最初の1か月ほどは、たきぎを運んだり、木を割ったり、遺体搜索（人捜し）をした。どちらかというと、捜すのは控え、重機を動かしている所の邪魔なものをよけたり、排水をした。まれに瓦礫の下に人がいることがあった。近くの火葬場がいっぱいになって土葬になる方もあった。自衛隊と一緒に遺体を運んで行って、柩をプレハブの仮置き場に安置した。



また、流された金庫を集めて1箇所に置いたら、泥棒にやられたのか、翌日すべて開けられていてがっかりした。3月末頃からガソリン泥棒がいた。り災証明を持っているから通すしかないが、後部を見るとポリタンクをいっぱい積んでいる。タイヤ泥棒もいた。いろいろな証明書が発行されていて、車がどんどん来るので見切れない。他の地区で警備のため巡回したというのは聞いたが、全戸流出した笠野地区では盗まれるものや、火事で燃えるものもないのでしなかった。

常磐線の貨車がひっくり返り、コンテナに玉ねぎ、じゃがいも、ミルク（脱脂粉乳）が入っているから、消防団に取って来てくれと要望があった。使えるなら救援物資に使ってほしいということで役場にJRから連絡が行ったのではないかと思うが、傾いているコンテナに入って中から手渡ししたが、何でこんなことまでするのかと嫌がる団員もいた。

1か月後くらいから、消防団としての活動は段々減って人も減り、最後には3名くらい残った。2か月目からは、交通誘導（関係車両を優先して通す）をした。5月になると、「実家を見たい」といった人達が来たが、行っても通れない。重機の邪魔になるが、“せっかく来たから”と言われると通さざるを得なかった。5月末までの3か月間、合計68日ほどこうした活動をした。

## 自分のこと、そしてこれから

東日本大震災後、自宅がある笠野区は、「避難指示区域」に指定された。笠野区は全戸流出し、自家用車を皆、2～3台は流している。私は、車はともかく、写真やパソコンのデータを、何で取って来なかったのかと悔しくてならない。警報が出た後、3時間もすれば自宅に帰れるからなどと理由を付けて取りに行かなかったが、すべてが、最初の波でパーンとやられてしまった。こんなに津波までの時間があったら、“もっと大事な物があったべ”と、尚更悔やんでいる。



中浜地区の常磐線線路

J A みやぎ亙理山下管内の130軒ほどあるイチゴ農家のほぼすべてが壊滅状態となり、3月11日から生活のすべてが一変し、精神的にまいった。最初の1か月くらいは本当にまいった。最低でも半日くらい休もうとしたが、休んでいるよりかえってやらなければいけないことがあるのがよかった。精神的に落ち着いてきたのは5月くらいだったが、震災から4～5日頃にはもう、イチゴ作りは山元町では当分やれない。新しい土地を探そうと決めていた。

そして6月、仙台の北にある大和町に、3年くらい使っていなかった古いハウスを借り、ビニールを張ったり、草刈りして、農業を再開し、7～8割方終わったところです。4月、草刈り機などの小さい農機具を買うことができた。人助けにもなったし、自分にとっても良かったと思った。家族は一緒に大和町に行こうと思ったが、母親は周りに知っている人がいなくなるので、山元町の仮設住宅に残り、私は単身で大和町にいる。

家も定まらず、仕事も決まらないので、5月いっぱい消防団を抜ける（一旦やめる）と言ったが、上から残ってくれと説得され、“絶対”“必ず”という、今まで通りの協力はできないが、消防団を続けることにした。瓦礫の処理もあるが自分のことも、どちらも重要だし、やっぱり友達も大切だ。遠くに行くほど、ここ山元町がいいと思う。帰れるようになったら、いつかは山元町に戻って来たい。とにかく前に進むしかない。あきらめるな山元町。

## 地元の利を活かせる 消防団の活動は重要

宮城県山元町消防団  
第6分団第2班 班長 菊池 康彦 (52歳)  
消防団歴 26年 (JA職員)



### 大津波の襲来を予想できなかった住民たち

浜通りの花釜地区は、仙台へ40分の通勤圏で、戸数1,000戸以上の住宅地として、山元町で一番の規模を誇っていた。3月11日の大地震の前の3月9日に起きた地震の際は、予想されていた宮城沖地震かと思われたが、揺れは少し小さく、津波の警報が出たため巡回を行ったが潮位の変化はなかった。町の指示に従い住民に避難を呼びかけたが、「津波はやはり来ない」と安心したところがあった。

3月11日はJAの吉田いちご選果場において、最盛期のいちごの出荷を確認し、職場に戻るため自動車に乗ったとたん、携帯電話から「緊急地震速報」の警報音がけたたましく鳴り始め、すぐに車を止めた。揺れは尋常ではなく、地面や田んぼも南北に揺れ、車外に出ようにも出ることが出来ず、外を見ると選果場の中にいた人たちは地面に這いつくばっていた。

自動車のラジオから「とにかく高いところに避難してください」と呼びかけており、東北放送のアナウンサーが震える声で「津波警報が出ました。仙台湾で6m」というのを聞いた。職場に戻るか、自宅に一度戻るか迷ったが、このアナウンサーの震える声で、私も焦り、本当に津波が来ると思い自宅に戻った。途中、職場から電話が入り「自宅を確認したい」と連絡して自宅に急いだ。

県道相馬亘理線は、所々道路が陥没し、橋も壊れ、大型トレーラーが立ち往生して止まっていたので、多くの車両がなかなか前に進めなかった。その間、ラジオからは最初津波は6mと言っていたが、その後「10m、到達時間は15時」と変更の放送をしていた。その時、山元町にも10分から15分後には必ず来ると思い、自宅に戻り妻の安否を確認後、母が友人という老人施設に避難させるために向かわせ、私は、自宅に鍵をかけて外へ出た。すると、以前、津波警報が出たときも逃げなかった近所のおばさんが散歩から帰ってきたので、「今回は違うんだから早く逃げて」と説得しながらも、津波到達時間が気になり、皆がいる老人施設に合流することを決めた。車を走らせると、いつも逃げることをしない浜通りの人たちが役場方面に逃げる人が多く、役場の広報無線が何故か鳴っていなかったため、ラジオの放送を聴いて逃げたと思った。それと同時に、自分は逃げ遅れていると思い、家族とバラバラにならないように、急いで老人施設に向かった。

老人施設で合流したが、高台の場所は地震と余震で地面が割れていて不安だったため、15時20分頃に、避難場所に指定されている役場に行くことにしたが、国道の一部路肩が壊され混んでいた。国道の場所でも高さが無く、津波が来たときに立ち往生していると危険と判断し、急遽山側の道路を迂回し役場に到着した。到着し、海を見るとまだ津波は来ていなかった。その時、山下第二小学



常磐線山下駅周辺

校の子どもたちが避難してきた。少ししてから再度海を見ると、南の方からと、東の方から大きな白波が見えたので、もっと上の公園の展望台上り確認すると、南側の波が先に到達し、山下選果場や小学校に入るのが見えた。波の高さからすると自宅まで行くと思ひ、「これはダメだ」と思った。その後は見る気にもなれず、数日後に自宅の確認に行ったが、自宅建物は流され、土台だけしか残っていなかった。津波により、建物や、家財家具は自宅があった場所から西と、北に散乱していた。東側の海の方面を見ると、松原は無惨にも無くなり、堤防まで見えた。

### おじいちゃんを助けて…

消防団の活動については、災害時は、農家や地元にいる人間が“広報しよう”ということになっていたが、我が班は非農家が多くて緊急時の対応がとれず、団員は3名しか集まらなかった。この数年で体制が変わり、緊急時の欠点をさらけ出した。そのため、常々「巡回・確認はしても、最終的には自分の身が大事。自分の安全確保」と言っていたので、広報活動を一通り行った後は、浜に下がる自動車に、「下がってはいけない！」と追い返していた。

団員は、津波を確認しポンプ車で急いで避難をした。途中で逃げ遅れた女の子を乗せたが、「おじいちゃんもいるので助けてください」と、言うので団員1名が救助に向かうと、その団員とおじ



搜索活動をする消防団員

いちゃんは襲ってきた津波に流され、女の子と団員を乗せたポンプ車も同時に流された。それぞれの団員は自力で泳ぎ民家の屋根や、住民に助けられたが、翌日、女の子はポンプ車の中で亡くなっていた。おじいちゃんも亡くなった。女の子はその団員の息子の同級生（中学2年生）で、謝りに行ったが、その子の親からは逆にねぎらいの言葉を言われ、余計に自分に責任を感じたと言われた。団員2名は、何秒間の間でいろいろな決断を迫られたようで、今でも「どうすればよかったのか…」と嘆いている。悲しい出来事で消防団の力の無さを感じ、素人判断で出来ることではなかったと思う。

その頃山下第二小学校では、最初は親が迎えに来た子どもだけを帰すという、マニュアルどおりに避難させていたが、近くを通った人から「何をしているんだ、早くにげろ！」と怒鳴られ、途中から避難方法を変え、6年生は走らせ、下級生は先生たちが自分の自動車で安全なところまで避難させ難を逃れた。また、隣の中浜小学校は、津波到達時間が15分以内のときは「動くな」というマニュアル（ルール）に則り、2階まで水が来たが、屋上の「屋根裏部屋」のような所で一晩明かし、翌日自衛隊のヘリで全員救助された。ここには、避難のマニュアルが明暗を分けたが、1人も犠牲者を出さなかったのは、海から約100mから200mの両校の立地条件からすると、奇跡としか言いようが無い。ただ、この成功例は、前記した私の避難や、消防団の避難とも違い、今後の教訓になることだろう。





大津波警報で町内を救助巡回中に津波の被害に遭い、消防団員も犠牲になった消防車（写真出典／災害臨時ラジオ局「りんごラジオ」ホームページより）

## 地域の津波被害

山元町の記録によると、実際に津波が来たのは15時50分だったが、もっと早く来たように感じた。合流した家族と、母の友人を役場に連れてきたが、役場は建物が地震のために壊れて危険と入れてもらえず、前にも避難したことのある山下中学校へ避難した。山下中学校はまだ避難している人は少なく、我々が避難した後、津波による被災者より山手の人たちが多く避難してきた。翌日になると、ずぶ濡れの人が避難してきた。

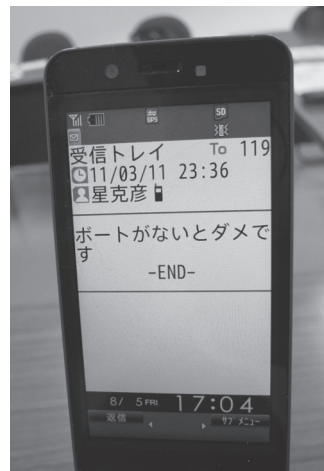
今回の災害は、沿岸部の方々の津波に対する恐怖心がなかったことが被害を大きくしたと思う。亡き父からも「津波は金華山で無くなるので、山元町には津波は来ない」と言われていて、津波は夢のまた夢、神話の世界だった。私の住む地区の班は30戸以上あるうち残ったのは3分の1に満たない程度だが、ほとんどの人が津波は来ないと思い、自宅に残ったり、足（車）が無かった人もいた。以前50cm程度の津波があった時も、避難所に逃げたのは、我が家の家族と消防団員の家族だけで、消防団が巡回しているのを見て、笑っているような状況だった。しかし、今回は私が自宅に戻ったときに、外に出ている人がおらず、すでに避難していると思ったが冷静に地域を回って確認すればよかったのかなどと悔やまれる。

また、我が班では1人の団員を犠牲にしてしま

った。ポンプ車と、軽トラックで避難の呼びかけをしていたが、いちご農家はかき入れ時だったため一旦家に戻って畑を見に行ってくると言い残し、津波にのまれてしまった。隣の5分団では、警戒中に3名、6分団でも3名の団員が亡くなっていた。“臆病な人ほど強い”と言うが、人間には限界があるから、我々にも危険が及んだ場合は近づくなという教訓である。

## 救出活動できなかった人からの無念のメール

震災当日の夜に、職場の友人から「笠野の焼却炉の近くに自宅の屋根ごと流された両親が取り残されているので助けて欲しい」と言われた。すぐに、役場に向かい役場の職員や、消防署の署員にこの事を告げるが、みな救出に出ていると断られたが、何度となく友人と頼み、どうにか救出に行ってもらうことになっ



メールで救助の要請が入った。しかし、実際は救助に行けなかったようだ。その間、友人からのメールで「救助隊が来ません」「レスキューに連絡を取ってください」と矢継ぎ早に連絡が入り、私も何度も頼んだのですが「ボートが無いと行けない」「水が引くまで待ってください」との返答だけだった。私たちは何の装備も準備も無く無力だったが、消防署の救助を信じて友人を励ました。3月12日の早朝3時40分にたまりかねた友人は、胸まで水に浸かって両親を救助したとメールが来た。

そのほか、山下駅前では声がしていた人もそのうち声がなくなって、朝になったら亡くなっていたという例や、避難している人が2階から見ていると「助けてくれー」という声がするが、消防



建物2階部分の窓ガラスが壊れている

署もどうしようもなかったというものもあった。また、救助を巡り、「死にそうだ」といった壮絶なメールが行き交った。3月12日朝方3時、死んでいく人からのメールや、5時「これまで長い間ありがとう」といった家族宛のメールも見せられた。

3月16日から消防団の救出活動に合流した。震災後5日目になったのは、ライフラインが復旧せず、連絡が取れなかったためだった。役場に居れば何処で救助しているかが分かったが、消防団活動していることも分からずにいたことは不本意であった。

救助活動に合流したが、我が団のポンプ車は大破し、法被や活動服も無く、急遽役場から準備をしてもらい活動を行った。6分団では4台のポンプ車があったが、2台が水没、1台が大破し、1班の岩佐班長が守った1台だけを、交替で使い救助活動に使った。その中で、私は少年野球を指導しており、教え子の子ども、消防団員1名の不明が判明し、決死の捜索を行った。しかし、自分は3月末の決算期だったこともあり、2週間で職場に戻り、土曜、日曜の活動を余儀なくされた。

3月12日からは、山元町に救助のお手伝いに来たのは愛知県の自衛隊だったが、最初の指令は人命救助ではなかったようで、装備が無く一旦戻ったとも聞いた。被害状況がしっかり伝えられていればこのような事は無かったと思う。消防団もポンプ車も無く、道具も無いので、人命救助といわれても、本部のそばで手伝うのが精一杯だった。

## 消防団活動にほしい装備等

ハード面で一番必要と思ったのは船、ボート。ゴムボートも町には無く、消防署にあったはずだが、ボートがあれば、かなりの人を助けることができたと思う。消防団では助けられなくて、肉親が助けにいった例が目立つ。肉親だから命を顧みずにできるが、こういう時の救助は、知識や訓練がないとできないと思った。訓練経験のない人間が人を助けるというのは危険だ。消防団もこれからは火災だけでなく、水害や地震・津波に対する訓練が必要だ。レスキュー隊のようなことをするには本当に訓練しないといけないが、消防署員のサポートとするなら、消防団の地位を確立して欲しいし、職場に影響がでないような体制を作ってもらわないとできない。

また、連絡方法についても、普段は携帯電話で消防からの指示があるが、今回のように携帯電話が通じず、防災行政無線での指示も今回は出来なかった。3日間ほどは役場の体制ができておらず、何の指示も来なかった。たまたま役場に行ったときに分団長と会い、救助の件を聞いたので、情報の伝達手段を考えなければいけない。それから、町の防災行政無線が鳴らずに機能しなかったのも、確実に町民に伝わるような、災害に強い伝達方法を確立しなければいけない。

それから、消防団が人命救助をするにあたって、防寒装備がなく、消防法被では水の中を歩くには動きにくく寒かった。活動服や、防寒装備を準備して欲しい。今回はマスク、手袋、長靴は支給されたが、自前の合羽を着て、毎日洗って活動をした。危険な活動や、悪天候にも対応した装備が団員に必要なと思う。また、今回の様にポンプ車を無くして、自家用車で道なき道を案内したり、捜索をする際の補償も検討すべきではないか。

ソフト面では、住民の自己防衛意識の持ち方が重要だと思う。震災後に起きた大きな余震が4月7日にあったが、この時も住民は逃げ方が分から



片付かない瓦礫の山

ず、自動車で逃げようとし、高台に逃げる自動車  
で道路が数珠つなぎになった。今後、防災行政無  
線の避難指示とあわせ、避難の仕方などを十分検  
討し、住民への情報を的確に伝えることが重要で  
ある。

## これからの消防団

第6分団は4班あるが、幹部が集まっても、今  
後消防団をどうすればいいのか判断が出来ない状  
態である。誰しも今回の津波は予想しておらず、  
避難活動を通じて命があるのが不思議なくらいで  
ある。

消防団員の経験の少なさにも危機感を持っている。  
今は、火災はめっきり減ったが、以前は、消  
防団の消火訓練については、野焼きの時の消火処  
理がよい訓練となって、団員が知らないうちに生  
の経験が出来た。その他、水防訓練も郡単位では  
行っているが、実際の水害時の土嚢作り程度であ  
った。心肺蘇生の訓練も何年か前に行っている。  
また、津波の時の消防団の行動には港などの「水  
位観測」もあったが、今回も同様に行っていたら  
消防団はほとんどダメだったろう。日中の災害だ  
ったが夜間の災害時は詰め所に集まることにもな  
っていたので、人的被害は大きくなってははず  
である。

## 不安が残る今後の消防団の行方

団員は準公務員ではあるが、自分たちの家庭や  
職場を優先した上でないと活動が出来ない。使命  
感がある一方で、非農家の人などが消防団に入  
り、職場優先でなかなか活動が出来ないジレンマ  
を持っている。震災後、団員同士で話すのは、  
「消防団はどうなるの?」ということだ。ほとん  
どの人は家が流出し、自分たちの守るべき家もな  
い。団の総会をして意思を確認したら、町外に  
出て戻らないという人が16名中4名いた。津波に  
のまれた2名は責任を感じていて、今後の活動は  
できない、3月までは頑張るが後は退団したいと  
言われている。

町の復興会議では、“住める人は残して、住め  
ない人は高台移転”の方針が出され、笠野地区な  
どは農地と化すことになる。町がどうやって集団  
移転させるのか、個人個人が住まいを構えた時、  
消防団はどうするのか、まだその辺の話が全然で  
きていないが、我々としては、10名でも7名でも  
団を維持していかなければならないと思っている。  
私自身、本来はこの3月で勇退のはずだったが、  
後任の副班長が仙台に転出し退団してしまっ  
たので、若い人がやる気のあるうちは、リーダー  
を育てる必要があるので、消防団に残ることにし  
た。ただ、ポンプ車もなければ、道具もないた  
め、消火や基本操作などを指導することが出来な  
い。最近も火災があつたり、行方不明者の捜索の  
手伝いもしているが、他の地区の消防団への引け  
目、負い目がある。

そんな中、町の広報誌に消防団の活動を載せて  
もらい、少しは報われホッとした。どこまで役に  
立ったのかなと思うが、できる範囲でやったつも  
りだ。やはり災害時は“地元の利を活かせるのは  
消防団”ではないかと思う。今後、団員をどうや  
って引き留めるか、班長としては悩ましい問題で  
ある。